大目標へ最善の努力…

世界選手権団長　田村正衛

第7回世界男子7人制選手権大会ば、いよいよ一ヶ月後にせまりました。

御承知のように今回の大会は2年後にミュンヘンで開かれるオリンピックへとつながっています。

日本男子が世界選手権に出場するのは今回が4回目ですが、オリンピックへ直結という大任がかけられていることは初めてであり、日本ハンドボール協会も、この一年間、総力をあげて今大会への精進を重ねて参りました。

幸い、日本協会、選手強化対策委員会らの努力によって、現在国内で選び得る最高のプレイヤーによる「全日本チーム」が編成できたことは何よりの喜びであり、たのもしさを感じるものであります

過去30余年の日本ハンドボール界の歴史と伝統を築いて来られた諸先輩の苦斗に報いるためにも、我々は、世界の最上位進出を目標に最善をつくして参る所存です。

内外からの情報によりますと列国のこの大会にかける斗志もまた著しいものがあるといわれております。

過去、日本チームは渡欧のたびに外国チームの地力に驚き、世界の壁の厚さを知らされて来ました

しかし、そうした苦い経験のつみ重ねによってようやく日本チームも〝世界〟を狙える力を貯えて来たものと確信しております。

われわれは、自らの力によって明日への栄光を獲得するために、いかなる努力も労苦も惜しまず、なおいっそうの錬磨をつづけていくつもりです。

列強の力を知る時、日本の前途は必しも楽観が許せません。が、われわれは一歩も引けないのです

選手が、チームが、役員が、代表団が、いや日本ハンドボール界が一丸となってベストをつくせばおのずと道は開けるものと信じております。

最後の仕上げに入った代表選手諸君も元気いっぱいであり、大目標に向かって一歩々々、しかも大きなステップによって前進をつづけています。胸をはって大会地に乗りこみ、力の限りプレーして参ります。

過去1年間、暖かい目で支援の力をさしのべって下さった全国関係者の皆さんに厚く御礼を申しあげるとともに、今後もこれまで以上の御声援を寄せられますようお願いいたします。（日本協会々長）

世界選手権選手団を送るにあたって

荒川清美

ミュンヘン・オリンピックをかけた第7回世界選手権大会に参加する選手団は過去二年間に亘る強化が実を結び、史上最高の技術・気力を兼ね備えたメンバーを組むことができた。

日本では、史上最高のメンバーではあるが、世界への道は厳しい念願のベストエイト入りを果すには、多くの試練が待ちかまえている。世界各国も日本に優るとも劣らない強化策を繰り、実行に移している。

従来の世界選手権では、過去2回ノールウェーを破ることはしたが、ベストエイト入りを果すには今一歩の力がなかった。

今回はナショナル候補選手も早くに決め、国内における八回の強化合宿、あるいはルーマニアを中心としたヨーロッパ諸国への転戦もすでにおえ、従来にない強化策を選手団にとっている。

理想的とは云えないまでも、現在の協会の体制から云って、かなりの思いきった強化策であった。

この一年間、頂点強化を目標にして、現在の協会でできる技術面・財政面での力を傾けて強化につとめてきた。もちろん満足のゆくものではないが、現状では、せいいっぱいの努力であった。

それだけに、今回の世界選手権にかける協会の意気ごみは判ってもらえると思う。

云いかえるならば、今後のハンドボール界の浮沈は今回の大会にかかっているといっても過言ではない。

この大会は好成績を残し、更にミュンヘン・オリンピックを目指し、一層の頂点強化を行ない、ここでも更に好成績を挙げることができるならば、種々の面にわたって、日本のハンドボール界の前途は誠に明るいものがある。

逆に、ここで不振の成績におわれば、今後の斯界の前途は並たいていのものでなくなる。今まで積みあげたものは水泡に帰し、全く白紙の状態からでなおさなければならない。今や全日本ハンドボール界の総力をあげて、全日本チームの健斗に期待したい。

日本独自の技術と十分な気力をもって、斗い、好成績を手土産に帰国することを切望する。（日本協会理事長）

「ハンドボール」2月号（第72号）目次

表紙写真・第16回全日本選抜選手権大洋デパート—三菱鉛筆（12月東京・山田 真市撮影）

技心向上の成果示すか日本

世界選手権代表決まる

田村団長ら16人

ミュンヘン・オリンピック（一九七二年）につながる第7回世界男子7人制選手権（2月26日〜3月8日・フランス）へ出場する晴れの日本代表選手団役員2、選手14人が決まった。

昨年12月21日全日本選抜選手権（東京体育館）の表彰式後日本協会から正式発表されたもので田村正衛日本協会々長を団長に、村田弘監督（選手強化対策委員長）、それに選手は数次の強化合宿、選ころを経て国内の最高レベルにある技倆の持ち主が厳選されている。

選手団は1月19日から7日間、2月1日から8日間強化合宿をいずれも東京で行ったあと、2月14日空路羽田を出発、めざす世界選手権へ臨むことになっているが、本誌でも既報のとおりこの大会の上位8ケ国には2年後ミュンヘンで開かれるオリンピック大会の出場権が自動的に与えられる予定で、日本ハンドボール界はもとより、国内スポーツ界からも代表チームには多大な期待が寄せられている。技心の向上めざましい斯界だけにその成果は大いに希望がもたれ、2月26日から始る予選リーグの対チェコ、対ユーゴ、対スペインは壮烈な試合展開となろう。

第7回世界男子7人制選手権
日　本　選　手　団

▽団　長		田村　正衛	（日本協会会長・65）
▽監　督		村田　弘	（選手強化対策委員長・45）②
▽コーチ		竹野　奉昭	（兼選手）
▽選　手			
	ＧＫ	本田　洋	（日体大・22）①
		下里　敏彦	（大崎電気・23）①
	ＦＰ	竹野　奉昭	（大崎電気・33）③
		江名　英彦	（三景・26）②
		近藤　信行	（大崎電気・26）②
		近森　克彦	（大崎電気・24）②
		飯田　誠行	（大崎電気・24）②
		木野　実	（ワクナガ薬品・24）②
		東　一敏	（大崎電気・24）①
		早川　清孝	（ワクナガ薬品・23）①
		野田　清	（大同製鋼・23）①
		藤中　憲二	（日体大・22）①
		斉藤　光男	（日体大・21）①
		中井　武三	（同志社大・20）①

○内数字は世界選手権出場回数

激しい練習がつづく
全日本代表の初合宿

世界選手権代表・村田弘監督ら16人は1月19日から25日まで東京・青少年センター体育館で遠征前1回目の強化合宿を行った。

大目標のかかった本大会まで40日足らずとあって選手たちの表情もはりつめたものが感じられ午前午後それぞれ3時間をこす激しい練習がつづいた。練習は体力、持久力の強化を中心に、組織プレーまで順調に進められたが、特に防禦練習は〝日本の課題〟とあってブロック、帰陣コンビネーションGKなど徹底的なものがあった。

また、19日午後は、本大会の会場の多くがタータンコートなところから国立代々木体育館附設のオールウエザーコートに出むき約2時間の練習をつむなど慎重な面ものぞかせた。出発（2月14日）まであと1回の合宿を行う予定。

デンマークなどと小手調べ

世界選手権に出場する全日本男子チームは、本大会前の調整を目的にデンマーク、西ドイツで国際試合を交える。

予定では2月16日から19日までのあいだにコペンハーゲンでデンマークチームと2試合、20日と22日にハンブルグとハノーバーで地元チームとそれぞれ試合を行う。

なお、世界選手権終了後オランダ、イスラエル、台湾（公開試合）を訪問の予定。

勝繁夫氏、コーチを辞退

世界選手権コーチに推された勝繁夫氏（選手強化対策委員）は、勤務先である立教大学が、学園紛争で1月から3月までの間に遅れた授業を行なうことになったため長期間の欧州遠征が不可能となり日本協会へ辞退を申しいれた。

日本協会では1月5日の常務理事会でこの申しいれを承認した。後任の補充は行わず、竹野奉昭選手をコーチ兼務とする。

審判員決まる
世界選手権

IHFではこのほど世界選手権の審判員22名の氏名を発表した。

国別では東ドイツ、西ドイツ、デンマーク、フランス、ルーマニア、スウェーデン、スイス、チェコ、ユーゴから各2人、ハンガリー、ノルウェー、ポーランド、ソビエトから各1人となっている。

日本の対チェコ戦はスウェーデンのT・ヤネルスタム、L・ラルソン両氏、対ユーゴー、対スペイン戦は東ドイツのH・ヘンゼル、H・シンガー両氏がそれぞれ担当する。

なお、IHF技術委員がIHFの代表者として各試合に立ちあうが日本の出場する予選リーグB組はS・ペライ氏（西ドイツ）の予定。

全日本、関東選抜の健斗に苦戦

全日本ナショナルチームの壮行試合は、1月25日駒沢屋内体育館にて、壮行式に引きつづいて、関東選抜との間で行なわれた。

全日本は関東選抜の健斗にあって苦しんだが、結局は三点差で降した。（観衆一千五百）

全日本15（7―5 / 8―7）12関東選抜

スタートは一進一退、チャンスらしいチャンスもないまま、3分が経過。先手は全日本が野田が得た7MTを近森が決め先行。続いて、中井、野田と決め、5分には3―0。全日本は中井を北井につけたマンツウマン。関東選抜もマンツウマン的なディフェンスをしき、ディフェンス陣は広範囲にゆさぶられはするが決定的なチャンスは与えず、逆にカットからの速攻などで、14分には、4―3と追い迫った。

関東選抜のフィールド・プレーヤのディフェンスは良くつめ、ベテランらしくパスコースを読み、また、全日本のパスとキャッチのタイミングの合わないところをつき、更には、綿貫のファイン・プレーが随所に見られ、全日本に散発的な得点しか許さず、前半を終了した。

後半に入っても、前半同様の得点経過をとり、一時は一点差に迫られる場面もあったが、近藤のミドルを中心とした攻撃で追いすがる関東選抜をふりきった。

体力向上を図ることを目的とした合宿の最後の日に当り全日本のコンディションは悪かったとは云え、ずるずるとベテランが多い関東選抜のペースにはまり、持ち前の力強さが見られなかったことはうなずけない。

攻撃面では、マンツウマン的なディフェンスに対し、クロスを多く使って、攻撃の糸口をつかむことを心がけていたが、これも今一歩のスピードがないため、完全にはふりきれず、チャンスをうみだすことはできなかった。

またGKの綿貫がいかに冴えていたとは云え、7MTをはじめとして、数本のノーマークに近いシュートをはずしていることもうなづけない。シュート率は15／33と良くない。

守備面について云えば、大西、北井（いずれも前回代表）に早いモーションのステップシュートを多く決められていた。これは昨11月の関東学生の際にも喜田、花輪に決められたシュートと同様で、このシュートに対する防禦が一つの研究課題となろう。

綿貫の好守をはじめとして、関東選抜の健斗のみが光った試合であった。（藤本）

得	【全日本】			【関東】		得
0	下　里	（大　崎）	GK	綿　貫	（東京教員）	0
0	本　田	（日体大）	GK			
1	飯　田	（大　崎）	FP	高　橋	（　〃　）	0
0	斎　藤	（日体大）	FP	藤　原	（　〃　）	0
2	近　森	（大　崎）	FP	山　口	（　〃　）	0
2	木　野	（湧　永）	FP	鈴　木	（　〃　）	0
0	早　川	（　〃　）	FP	高　野	（　〃　）	2
2	中　井	（同　大）	FP	大　西	（　〃　）	5
0	東	（大　崎）	FP	小　山	（　〃　）	1
0	藤　中	（日体大）	FP	島　田	（　〃　）	0
1	江　名	（三　景）	FP	北　井	（埼玉教員）	3
0	竹　野	（大　崎）	FP	結　城	（　〃　）	1
4	近　藤	（　〃　）	FP	佐　野	（日軽金属）	0
3	野　田	（大　同）	FP			
15		（2）	7MT		（0）	12

（審判　岡前・佐野）

退場者　小山（2分）

日本選手団スケジュール

（日時はいずれも現地時間）

2月14日　後10.15　羽田発（AF273便）
15日　12.55　コペンハーゲン着
17日　デンマークにおける第1戦
19日　デンマークにおける第2戦
20日　前11.30　コペンハーゲン発
12.20　ハンブルグ着
後 8.00　ハンブルグにおける親善試合
22日　後 5.00　ハノーバーにおける親善試合
24日　前 7.50　ハノーバー発
前10.35　パリ着（注　パリ→バイオンヌは列車）
26日　後 8.30　**第1戦　対チェコ**（バイオンヌ体育館）
27日　後 3.25　バイオンヌ発、後7.43アジエン着
28日　後 9.00　**第2戦　対ユーゴー**（アジエン市営体育館）
3月1日　前 9.30　アジエン発　バスでツールーズ着
後 3.30　**第3戦　対スペイン**（ツールーズ体育館）

予定
2日　予選リーグ1位の場合は / 2位の場合は（決勝トーナメントのため）ブザンソンへ / グルノーブルへ
3位の場合は9位決定リーグのためパリへ
3日　後 8.30　決勝トーナメント1回戦又は9位決定リーグ第1戦
4日　後 9.00　9位の決定リーグ第2戦（決勝トーナメントへ進出している場合は次の試合地へ移動）
5日　後 8.30　決勝トーナメント2回戦又は5・6位決定戦予備戦（9位決定リーグ出場中の場合は休息日）
6日　後 7.30　9位決定リーグ最終戦
7日　後 7.30　5・6位決定戦
後 9.00　3・4位決定戦
8日　後 2.45　7・8位決定戦
後 4.30　決勝戦
（いずれもパリハンドボールパレス）
9日以降帰国までのスケジュールは未定

（注）1．予選リーグ4位の場合　3月2日以降のスケジュールは未定
2．フランスにおける宿舎
バイオンヌ……パスセスピレネエホテル（TELバイオンヌ25―24―07）
アジエン……レクエルシイホテル（TEL66―35―49）
ツールーズ……グランドホテル（TELツールース22―39―93）
ブザンソン……ニユーホテル（TFEブザンソン80-33-97）
グルノーブル……モデルネホテル（TELグルノーブル44―02―71）
パリ……ヒルトン・オルリイホテル（TELパリ726―40―00）

全日本代表選手の横顔

田村団長

村田監督

竹野コーチ兼選手

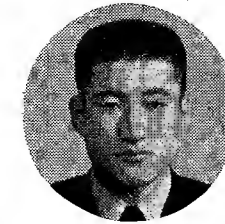
GK下里敏彦

GK本田　洋

団長　田村　正衛

三重県出身、明治39年生れ、同志社大出、日本協会々長、田村紡績社長、日本写真協会理事（二科会々友）＝団長原稿は本誌1頁参照

監督　村田　弘

大阪府出身、大正13年10月生れ、日体大出、日本協会選手強化対策委員長、全国高体連ハンドボール部常任委員、全日本教職員連盟理事、第6回世界男子7人制選手権監督、昭44欧州遠征全日本男子監督大阪府立三国丘高校教論＝抱負は別掲

コーチ兼FP　竹野　奉昭

熊本県出身、昭和11年7月生れ、大崎電気工業勤務（熊本藤園中－済々黌高－日体大出）＝球歴16年、1m74、75K第4・5回世界選手権代表、昭40中共遠征、昭44欧州遠征

竹野コーチ兼選手の話

個人的には3回目の世界選手権出場でもあり、なんとか〝世界上位の壁〟を破りたいと思う。今回は勝コーチの辞任もあり、コーチ兼任という重責をになっているだけに、責任が重い。チームとしては、もちろんベストエイト入りを目標にするが、個人としては、本当に世界選手権を戦いぬいてきたんだなあ、本当にヨーロッパ遠征をしたんだという実感のもてる遠征にしたい。

GK　下里　敏彦

熊本県出身、昭和21年6月生れ大崎電気工業勤務（熊本日川中－熊本市商出）＝球歴8年1m84、73K、昭44欧州遠征

下里選手の話

第七回世界選手権大会（オリンピックの予選を兼る）のメンバーの一員に選ばれた事は、非常に光栄に思っています。今大会の成績がハンドボール界を左右するといっても過言ではないと思っています。一致団結してハンドボール関係者の期待にそえるような、成績を残すように、頑張ってきます。

GK　本田　洋

大阪府出身、昭和22年3月生れ、日体大3年（大阪三国丘中－堺工高出、いちぢ本田技研に在籍）＝球歴8年、1m78、72K、昭44欧州遠征

本田選手の話

第七回世界選手権大会のメンバーに選ばれたことは、私の一生涯の誇りと喜びです。チームに於きましては、団結協和を信条とし、不退転の精神を貫きます。そしてミュンヘンオリンピックへの出場権獲得を果たす覚悟です。

FP　江名　英彦

東京都出身、昭和18年2月生れ、三景勤務（東京代々木中－神代高－立教大出）＝球歴11年、1m77、73K、第6回世界選手権代表

江名選手の話

ミュンヘン・オリンピックを二年後に控えた今回の世界選手権大会には、全国のハンドボール関係者の方々のいろいろの意味での願いが我々に託されている事を我々は十分自覚せねばなりません。そのためにも全員が融和の精神とほこりと意地を持って、プレーの執念、勝利の執念をおこたってはならず、又努力は惜んではならないと決意して居ります。

FP　近藤　信行

愛知県出身、昭和19年1月生れ、大崎電気工業勤務（愛知鳴海中－桜台高－芝浦工大出）＝球歴13年、1m70、63K第6回世界選手権代表、昭44欧州遠征

近藤選手の話

今大会の成績がハンドボール界の盛衰につながると云っても過言でない。天下分け目の大会に日本の代表選手として、日本人の心意気を示すべく大和魂の精神で、日頃鍛えたわざを十二分に発揮し全国のハンドボール関係者の期待にそうよう粉骨砕心頑張ります。

FP　飯田　誠行

京都市出身、昭和20年7月生れ、大崎電気工業勤務（京都松原中－伏見工－同志社大出）＝球歴10年、1m88、75K、第6回世界選手権代表、昭44欧州遠征

飯田選手の話

私が初参加しました第6回大会からすでに3年を経て、今ここに意義深い第7回大会を迎え、選手団の一員となった事を喜こぶと同時に責任を感じざるにはおられません。そして選手団全員が一丸となって自己の持てるベストをつくしまたチームをベストの状態にした時には、きっといい結果が現われる事を信じ、頑張りたいと思います。

FP 近森 克彦

山口県出身、昭和20年9月生れ、大崎電気工業勤務（山口富田中―徳山高―芝浦工大出いちぢ日新製鋼呉に在籍）＝球歴9年、1m81、74K、第6回世界選手権代表、昭44欧州遠征

近森選手の話

二度目の世界選手権で、今度こそは世界の強豪を破りたい。今回は全てが真剣勝負であり、全てが又ミュンヘンオリンピックに通ずる、なれば日本代表となった責任と自覚を更に強くもって臨みたい。特にユーゴ戦には昨年来の合宿強化を結実とし、決勝リーグ入りを果たしたい。皆様の御期待に答えるべく頑張ってくる覚悟です

FP 東 一敏

熊本県出身、昭和20年9月生れ、大崎電気工業勤務（熊本花陵中―熊本市商―立教大出）＝球歴10年、1m79、67K昭44欧州遠征

東選手の話

第七回七人制世界選手権大会に日本代表の一員に加わる事が出来嬉しく思います。

我々に、加せられた責任は重く今回の戦績によっては、日本ハンドボール界も変るのではと思う。昨年、欧州遠征時にも、出場国の今大会への熱の入れようが、異常なほどでもあり、対戦するチェコユーゴにも、前回同様、捨身で、ぶつかったら、おのずと良い結果が出てくるだろう。

頑張って来ます。

世界選手権への決意と抱負

監督　村田　弘

ミュンヘン・オリンピックの出場権をかけた今回の選手権は特に激烈を極める事でしょう。又日本のハンドボール界もこの選手権に大いなる期待をしていることは言うまでもありません

選手権大会とは、国と国、民族と民族、技術と技術、魂と魂の戦いであって兵器なき戦争と言ってよいでしょう。兵器に代るものが高度な技術、戦術、チームワークそして勝利への執念というものです。なにがなんでも勝たねばなりません。負けるとそれは惨めなものになります。決意とか抱負とかいうものは何とでも書き話せますがしかし結果は試合の終った時に出るものです。そのために大いに〝やる気〟を出し最善の努力を尽くす決意です。

日本は、第四回大会以来今度で四度目の出場です。回を追って実力は向上しヨーロッパの強敵に接近してきました。その証拠に5、6回に同じノウェーから一勝しています。今回はそういう意味でも一つの壁を破って二勝し待望のベスト8に入り出場権を獲得し同時に決勝トーナメントに進出したいものです。しかし勝負は非常に難関であることを自覚しなければなりませんすなわち予選リーグは前回優勝のチェコ、今回優勝候補にあげられているユーゴそしてスペインとの対戦です。

ハンドボールは防御だと言われるように失点を少なくすること、特に日本チームは得点が得られるので失点を最少限に食い止めの特徴とする〝素早さと正確で変化に富んだハンドボール〟によって勝利を握りたいものです。

国際試合は何と言っても経験がものを言います。ヨーロッパに比べるとそれは劣りますが昨年五月から二ケ月間今度の選手権にそなえてヨーロッパ遠征をしました。これを大いに生かして頑張ります。

FP 木野 実

大阪府出身、昭和20年12月生れ、ワクナガ薬品勤務（大阪旭東中―寝屋川高―立教大出）＝球歴9年、1m80、75K昭37韓国遠征（高校）第6回世界選手権代表、昭44欧州遠征

木野選手の話

オリンピックへの切符を手にすべく今大会に参加させて戴く事は非常なる感激と重大な責任とで体がひきしまる思いです。勝てば官軍、負ければぞく軍と云われます様に、一点差で負ければ、いくら試合内容がよくても善戦したといわれても敗者は、敗者です。そのために今後勝つための練習を積み勝負根性を養い、粘りのある、そして相当な勇気と気迫でこれを乗り越える覚悟です。

FP 野田 清

愛知県出身、昭和21年4月生れ、大同製鋼勤務（名古屋守山西中―愛知工―立教大出）＝球歴9年、1m69、65K、昭44欧州遠征

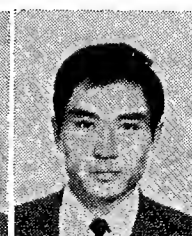
野田選手の話

世界選手権メンバーの一員に選ばれたことは、すなわち、ミュヘンオリンピックへの片道切符を獲得せねばならぬ、ということだと思っております。このため私は私のもてる力を十二分に発揮し、日

ＦＰ木野　実

ＦＰ東　一敏

ＦＰ近森克彦

ＦＰ飯田誠行

ＦＰ江名英彦

ＦＰ近藤信行

ＦＰ中井武三

ＦＰ斉藤光男

ＦＰ藤中憲二

ＦＰ早川清孝

ＦＰ野田　清

本チーム勝利のために最大の努力をはらってまいります。

FP 早川 清孝

福岡県出身、昭和21年7月生れ、ワクナガ薬品勤務（福岡玄海中—博多工—日体大出）＝球歴8年、1m79、72K、昭44欧州遠征

早川選手の話

日本のハンドボール界に於て、最大の目標が定められている現在（オリンピック出場権）選手団にかせられた使命ははかりしれぬ多大なものであり事の重大さを痛切に感じている次第であります。自分自身に強く努力邁進すると共に期待に答えるべく最善の成果が上げれるように精一杯力の限り頑張ってまいります。

FP 藤中 憲二

山口県出身、昭和22年11月生れ、日体大4年（山口天尾中—岩国工出）＝球歴10年、1m77、69K、昭39沖縄遠征（高校）、昭44欧州遠征

藤中選手の話

第7回世界選手権の代表に選ばれたことを光栄に思っています。フランスでの世界大会で死力を尽すことは言うまでもありませんがその他の所で試合、練習など良く観察し、ヨーロッパハンドボールを勉強し研究して帰るつもりですせっかくのチャンスを生かしこれから社会人となっても頑張りたいと思います。

FP 斎藤 光男

群馬県出身、昭和24年1月生れ、日体大3年（群馬甘楽第一中—富岡高出）＝球歴6年1m81、80K、昭44韓国遠征（大学）

斎藤選手の話

オリンピック予選を兼ねる世界選手権メンバーの一員に選出された事は私にとって非常に光栄に思っております。なにか分にも右も左もわからない様な私ではありますが、少しでも諸先輩達のプレーを吸収し日本代表としてはずかしくない様頑張ってまいります。また外国のプレーを学び少しでも日本ハンドボール界向上にやくだてばと思っております。

FP 中井 武三

京都市出身、同志社大3年（京都八条中—伏見工出）＝球歴9年、1m79、69K昭44欧州遠征

中井選手の話

世界選手権の代表に選らばれ、自分に与えられた事の重大さを痛切に感じています。この大会はミュンヘンオリンピック出場がかかっていますので全力を尽し、頑張ってきます。そして、他の国のハンドボールマンの技術をより多く学びとって来たいと思っています。

選考経過

一昨年くれに選び出した98選手を三次にわたる入れ替えで21選手にしぼったのが昨秋9月。

さらにそこから晴れの代表14選手を選抜するのはかなりの〝難事業〟であった。第三次候補21選手の技倆は伯仲しており、大詰めの選考委員会は、12月19、20日いずれも3時間余を費す論議がくり返された。選考の条件とされたのは①ヨーロッパ選手に対抗できる体格・体力②外国勢に通用する特殊な技能③経験④防禦力⑤攻撃力といった点で、特に防禦力は単に守りが巧いということではなくポジションのとりかたなどインサイドなテクニックも追究された。

その結果、大型化を狙う攻撃選手としてオールラウンドな木野近森、飯田、東、藤中、中井らが推せんされ、体格にこだわらず卓抜したテクニックをもつ近藤、野田らが昨夏の欧州遠征を通しての体験から推された。

防禦力を高く買われたのは竹野江名のベテラン。この二選手は、ヨーロッパ諸チームに比べて若さの目立つ日本チームの技心両面のリードマンとして豊富なキャリアも重視されたようだ。このほか防禦面でシャープな動きを見せる早川、恵れた体力をもつ斎藤の攻撃力が栄光の座をかち得た。

問題となったのはサウスポー。期待の有永（立大）がヒザの故障が全治せず見送られ、新実（芝浦工大）も経験不足ということで惜しくもはずされた。昨夏、北井（埼玉教員）が辞退し『左利きのいないナショナルチームなどヨーロッパでは考えられまい』（村田監督の話）という変則的な編成になった。GKは、FP以上にその技倆が紙一重だったが体格、瞬発力などで本田、下里に落ちついた。14選手の顔ぶれはまず順当。全国関係者の〝最大公約数〟が選出されたといってよいだろう。

世界選手権と日本

～過去の記録を探る～

ノルウェーから2勝あげる

日本男子の成績

全日本男子のこれまでの通算成績は8戦2勝6敗。3回とも予選リーグの壁を突破していない

▼第4回（36年3月・西ドイツ）

▽予選リーグC組

チェコ 38（23－5、15－5）10 日本

【日本】		得
GK	福本　弘	0
	今野　邦彦	0
FP	村上　善英	0
	佐藤　宏輔	1
	深江幸次郎	3
	服部　和記	0
	高村　武彦	0
	田口　侑義	1
	山田　幸男	1
	竹野　奉昭	4
	近藤　金博	0
		10

ルーマニア 29（15－4、14－7）11 日本

【日本】		得
GK	福本	0
	今野	0
FP	村上	0
	佐藤	2
	深江	0
	服部	2
	田口	0
	井上　裕人	1
	宮原藤支男	0
	山田	0
	竹野	6
		11

▼第5回（39年3月・チェコ）

▽予選リーグD組

日本 18（9－10、9－4）14 ノルウェー

【日本】		得
GK	福本　弘	0
FP	竹野　奉昭	9
	東　嘉伸	1
	宮原藤支男	0
	田口　侑義	0
	北村　尚英	5
	住広　尚三	3
		18

ソビエト 40（17－4、23－6）10 日本

【日本】		得
GK	福本	0
	尾形　譲	0
FP	竹野	2
	東	0
	宮原	1
	田口	1
	北村	0
	住広	3
	新　繁樹	1
	井上素行	2
	金田純男	0
		10

ルーマニア 36（20－5、16－7）12 日本

【日本】		得
GK	福本	0
	尾形	0
FP	竹野	6
	東	3
	宮原	0
	田口	0
	北村	0
	住広	1
	新	1
	井上	1
		12

▼第6回（42年1月・スウェーデン）

▽予選リーグB組

ハンガリー 30（16－13、14－12）25 日本

【日本】		得
GK	尾形　譲	0
	竹下洋一	0
FP	北井晴次	1
	木野　実	6
	近森克彦	2
	飯田誠行	2
	江名英彦	0
	飯端寿昭	12
	近藤信行	2
	北村文雄	0
	青木義男	0
		25

西ドイツ 38（21－15、17－12）27 日本

【日本】		得
GK	尾形	0
	竹下	0
FP	北井	3
	青木	0
	江名	3
	木野	8
	近森	4
	飯田	0
	関根邦夫	1
	飯端	7
	近藤	1
		27

日本 21（10－9、11－7）16 ノルウェー

【日本】		得
GK	尾形	0
	竹下	0
FP	山田透	0
	北井	4
	江名	1
	木野	9
	近森	2
	飯田	0
	飯端	4
	近藤	1
	青木	0
		21

チーム力、回毎に向上

チーム記録

過去3大会8試合における日本の総得点は129、総失点は246。大会別にみると

	総得点	総失点	差
第4回	21	67	マイナス46
第5回	40	90	マイナス50
第6回	68	89	マイナス21

ということになり、得失点差が少なくなって来ていることが判る。

これを1試合平均にしてみると

	得点	失点	差
第4回	10.5	33.5	マイナス23
第5回	13.3	30	マイナス16.7
第6回	22.6	29.6	マイナス7

となり、日本のチーム力向上がいっそうはっきりする。

各部門で竹野がトップ

個人記録

世界選手権という檜舞台を踏んだ日本選手（男）はこれまでに32人（GK4、FP28）。8試合を通じての延人数は83人となる。

個人の最多代表回数は、今回を含めて竹野奉昭（日体大―大崎電気）の3回が最高。

試合数は竹野、田口侑義（芝浦工大―元・大崎電気）、福本弘（芝浦工大―大崎電気）、尾形譲（立教大―三景）の4選手が5試合を記録している。

得点は竹野が出場5試合にすべて得点、27点をマークしてトップに立っている。前回予選リーグの得点王となった木野実（立教大―ワクナガ薬品）の23点、飯端寿昭（関学―三国丘ク）の22点がこれにつづく。

参考記録

世界選手権以外に日本男子（ナショナルチーム）が対戦した外国ナショナルチームとの公式スコアは次の19試合が記録されている（11人制は除く）。※印は国内における試合

●20―37　チェコ（昭36）
●14―27　フランス（昭39）
○20―17　イスラエル（昭39）
●14―26　中共（昭40）
●14―26　中共（昭40）
●16―22　中共（昭40）
●17―18　中共（昭41※）
●9―34　ルーマニア（昭42）
●29―34　フィンランド（昭42）
●21―27　スペイン（昭42）
○15―13　ルーマニア（昭44）
○12―11　ルーマニア（昭44）
○24―23　ハンガリー（昭44）
●20―31　ハンガリー（昭44）
●13―30　ソビエト（昭44）
○19―18　ユーゴー（昭44）
●12―15　ルーマニア（昭44）
△21―21　ハンガリー（昭44）
●16―24　西ドイツ（昭44）

このほかに非公式試合として次の3試合がある。

●7―40　チェコ（昭39）
●15―23　アラブ連合（昭39）
●11―13　イスラエル（昭39）

―世界男子7人制歴代上位国―

▽第1回（昭13）①ドイツ②オーストリア③スウェーデン
▽第2回（昭29）①スウェーデン②西ドイツ③チェコ
▽第3回（昭33）①スウェーデン②チェコ③ドイツ（東西連合）
▽第4回（昭36）①ルーマニア②チェコ③スウェーデン
▽第5回（昭39）①ルーマニア②スウェーデン③チェコ
▽第6回（昭42）①チェコ②デンマーク③ルーマニア

世界選手権を展望する

藤本　強

第7回男子7人制世界選手権大会は2月26日から3月8日までフランス25都市42会場に世界の強豪16ケ国が参加して開かれる。

日本代表も別頁の通り正式に決定し、世界の桧舞台での活躍が期待されている。

ここで、今冬の対戦資料をもとにして、優勝の行方を探ってみたい。過去2回のベストエイトを見ると、チェコ、デンマーク、ルーマニア、ソ連、スウェーデン、西ドイツ、ユーゴー、ハンガリーとなり、大会順位は変っているが、ベストエイト入りした8ケ国は全く変動がない。

最近の試合ぶりから、現在のトップチームを探ると、ルーマニア、チェコ、東ドイツ、ソ連がまずあげられよう。これに紙一重で、続いているのが、ユーゴー、西ドイツ、デンマーク、ポーランド、ハンガリー、それに我が日本ということころであろう。かっての覇者スウェーデンは、ティミソアラ・カップでは準優勝をしているが、どうも往年の面影はないようである。かわって、前二回の大会いずれも、不運にも予選リーグで消えた東ドイツが大きく抬頭しよう

このような背景をおき、予選リーグ各組を見ていこう。

予選リーグ組み分け

▽A組　ソビエト
　　　東ドイツ
　　　スエーデン
　　　ノルウエー

▽B組　日本
　　　チエコ
　　　ユーゴー
　　　スペイン

▽C組　ルーマニア
　　　西ドイツ
　　　フランス
　　　スイス

▽D組　デンマーク
　　　ハンガリー
　　　ポーランド
　　　アイスランド

日本の予選リーグ日程

- 2月26日午後8時30分　対チエコ（バイオンヌ）
- 2月28日午後9時　対ユーゴ（アジエン）
- 3月1日午後3時30分　対スペイン（ツールズ）

東ドイツ、ソ連の進出は決定的

A組　前回、前々回ともダークホースにあげられながら、予選リーグの最激戦グループに入り、悲運の涙をのんだ東ドイツが今季はバルチックカップ、シュヴェリン国際トーナメントに優勝するなどして、きわめて快調であり、今回は決勝トーナメントに進出することは確実であろう。

チンマーマン、ガンショーを中心にした攻撃は一流、ディフェンスもいい。これと並んで、ソ連の決勝トーナメント進出もまず固いと考えられる。クリモフ、ソロムコ、マクシモフらの攻撃力は、大量得点をあげるのが得意。スウェーデンにはかっての冴えがなく、ノールウェーと3位を争うものと考えられるが、エース・エリクソンを擁するスウェーデンが一歩有利となろう。

チェコ・ユーゴとの対戦が大きなカギ

B組　前々回同様、我が国はすこぶる不利な予選のグループに入ることになった。2連勝を狙うチエコは、前回とほぼ同様なメンバーで臨むようだ。マレス、デュダの二人のベテランに加え、ブルナとともにハブリクが大きく成長した。国際交流はさしてさかんではないが超一流の実力を備えている。それに加え、ここのところ成長いちぢるしいユーゴーが入っているのであるから、この予選を勝ちぬくのはかなりの難問である。ユーゴーはタシマイダン杯で日本に敗れたことで、十分に対日本策を練ってくることが予想される。タシマイダンの時のユーゴーはエース・ザグメスターを欠いている。予選の対スペイン戦でもザグメスターは多くの得点をたたきだしている。攻撃の主力はこのザグメスターとホルバトの二人と考えられるが、これをいかにかわすかが日本の課題となろう。

念願のベスト8入りを果すためにはどうしても従来の一流国をたたかねばできない。幸い夏のヨーロッパ遠征で力をつけ、これまでの世界選手権の時よりははるかに力はあがっているのだ。何としてでもチェコ、ユーゴーをたおしてもらいたいものだ。後に触れるように、予選リーグが最大の難関でこれを突破すれば、上位への道のほうが容易なのである。ザグメスターが入らなければ、とにかく一度勝った相手なのだ。チェコといっても、前回の時ほど鉄壁でなく選手も老化し、昨年はかなりの数のとりこぼしを見せている。他の一チームにはカナダが財政上の理由で棄権し、スペインが出場するもよう（本誌11頁参照）エース・モレラをようし、かなりの難敵となろう。とにかく、予選リーグを勝ちぬくこと。これによって自ずと上位への道をきり開くことができよう。

フランス、スイスはほとんどチャンスなし

C組　ルーマニア、西ドイツの優位はまず動かし難い。前回3位

決勝トーナメント組み合せ

- イ：A組1位—C組2位
- ロ：B組1位—D組2位
- ハ：C組1位—A組2位
- ニ：D組1位—B組2位
- ホ：イの勝者—ロの勝者
- ヘ：ハの勝者—ニの勝者
- 優勝：ホの勝者—への勝者

3位決定戦

ホの敗者—への敗者

5〜8位決定トーナメント組み合せ

- ト：イの敗者—ロの敗者
- チ：ハの敗者—ニの敗者
- 5位：トの勝者—チの勝者

7位決定戦

トの敗者—チの敗者

9〜12位決定リーグ

第1日	A組3位—C組3位 B組3位—D組3位
第2日	D組3位—A組3位 C組3位—B組3位
第3日	A組3位—B組3位 C組3位—D組3位

になったとは云え、実力的には、十分に優勝の可能性のあったルーマニア。グルイアが健在であるしこれに続く若手の成長もいちぢるしい。まず無傷で予選リーグを通過することは確実であろう。昨シーズンの状況では、西ドイツは十分ルーマニアの対抗にあげるれるところだが、今シーズンちよつとさえないようである。主力はルブキング、シュミット、ミュラーが健在。世界選手権に入る前にも多くの国際交流を行なう予定、これが本大会にどうでるかが一つの見どころとなろう。ホスト国のフランスはこの両国にはさまれて苦しい。スイスとの三位争いが見ものとなろう。

デンマーク、ハンガリー、ポーランド三ツ巴の争い

D組 デンマーク、ハンガリーポーランドとほぼ実力互角の三国これに加えて、成長株のアイスランドと、もっとも予測のつきにくいグループである。デンマークは前回の最優秀キーパー、ホルストが引退したらしく、他は前回のメンバーが主力になろうが、チーム力はやや衰え気味である。ハンガリーはマロシ、コバクス、フェンヨーなどの攻撃力が売り物のチームポーランドはここ3年の間にチーム力をグッとつけてきており、各種のトーナメントでも相当の成績を残している。アイスランドもこれら3チームに比べるとやや力はおちるが、波にのれば、どのような破乱をおこすかは判らない。

ベスト・フォアの可能性も十分

以上見たように、その後のトーナメントを考えるためあえて予選リーグの成績を予想するとA組は東ドイツ、ソ連、B組のチェコ、日本もしくはユーゴー、C組はルーマニア、西ドイツ、D組はポーランド、ハンガリーもしくはデンマークという形になろう。したがって準々決勝の組み合せは東ドイツ――西ドイツ、チェコ――ハンガリーもしくはデンマーク、ルーマニア――ソ連、日本もしくはユーゴー――ポーランドという形になる可能性が強い。ここで白熱しそうなのは東西両ドイツ、ルーマニア――ソ連の両試合である。おそらく、東ドイツ、チェコ、ルーマニアが勝ち、残る一つを日本もしくはユーゴーとポーランドが争う形となろう。D組の1位は三ケ国の可能性があることは前に触れたが、このいずれが出てきてもユーゴー以上の実力をもちあわせていないことは衆目の一致するところであろう。もし、日本が予選リーグで勝ち残ることができるならば、準々決勝に勝つことはさしたる難問ではない。順調にいって、ベストフォアに残ることができ、ここで多分、ルーマニアと当ることとなろう。

ルーマニアが有利なことは否めない。一方の組はチェコ――東ドイツの組み合せとなろう。これは全く予断を許さない。

ルーマニア、チェコ、ソ連、東ドイツの争いか

結局、予選グループの順位が仮にどう入れかわったとしてもルーマニア、チェコ、ソ連、東ドイツが事実上の決勝戦的なものを行なうことになろう。あえて一国をあげるならば最近の戦いぶりからいって、ルーマニアを筆頭にあげたい。

日本悪くいっても9位

不幸にして、予選リーグで敗れることがあっても、9位リーグでは日本の実力は第一級である。A組からはスウェーデンもしくはノルウェー、C組からはフランス、D組は三つ巴の一国が日本もしくはユーゴーと対戦することになろう。最近のスウェーデンはノルウェーに敗れるなど、好調とはいえないだけに、ここの勝者はB組もしくはD組からでると考えられるD組からハンガリーがでてきた場合、これはすでに夏に三度戦って1勝1敗1分、内容的には日本が押していただけに十分勝機がある。他のチームの場合には、ハンガリーより劣っているのであるから、これまた十分に勝機があろう。

世界の王座はこの大会を機に大きく変動しようとしている。

大会全日程

▽第1日（2月26日，8会場）
- 日本―チエコ
- ユーゴ―スペイン
- ソ連―東独
- スエーデン―ノルウエー
- ルーマニア―フランス
- 西独―スイス
- デンマーク―ポーランド
- ハンガリー―アイスランド

▽第2日（2月28日，6会場）
- 日本―ユーゴ
- チエコ―スペイン
- スエーデン―東独
- ソ連―ノルウエー
- ルーマニア―スイス
- 西独―フランス
- デンマーク―アイスランド
- ハンガリー―ポーランド

▽第3日（3月1日，4会場）
- 日本―スペイン
- チエコ―ユーゴ
- 東独―ノルウェー
- ソ連―スウェーデン
- フランス―スイス
- ルーマニア―西独
- アイスランド―ポーランド
- デンマーク―ハンガリー

以上3日間の各試合は予選リーグ

▽第4日（3月3日　5会場）
- 決勝トーナメント1回戦4試合
- 9―12位決定リーグ第1日

▽第5日（3月4日　1会場）
- 9―12位決定リーグ第2日

▽第6日（3月5日　4会場）
- 決勝トーナメント2回戦＝準決勝
- 5位決定トーナメント第1次戦

▽第7日（3月6日　1会場）
- 9―12位決定リーグ最終日

▽第8日（3月7日　1会場）
- 5位決定戦
- 3位決定戦

▽第9日（3月8日　1会場）
- 7位決定戦
- 優勝戦

☆☆☆☆☆☆☆ 海外トピックス

── 杉山　茂 ──

王者・チェコの近況

前回の世界選手権優勝国で今春の第7回世界選手権では日本と予選リーグ同組となったチェコの近況をまとめてみよう。

今シーズン国外初遠征のトビリシ・トーナメント（後掲）ではソビエトに惜敗、その後しばらく国内で調整をしたあとルーマニア、デンマークとそれぞれ2連戦を行った。デンマークは前回決勝の相手、ルーマニアは3位国。さらに今年に入ってソビエトと今季第2戦、オッフエンバッハトーナメントでユーゴと対戦（記録未着）している。スコアからみると好調とはいいがたい。

ルーマニア 20（10－6、10－9）15 チェコ
チェコ 15（7－7、8－8）15 ルーマニア
チェコ 25（13－10、12－15）25 デンマーク
チェコ 21（11－11、10－6）17 デンマーク
ソビエト 20（11－8、9－8）16 チェコ

これらの試合の主力はマレス、クラナト、ズーダ、ハブリク、コネクニイといった相変らずの顔ぶれである。

ユーゴ、ソビエトに敗る
──カルコフ国際リーグ──

ウクライナ共和国連盟の最大行事であるカルコフ国際リーグはゲストチームにユーゴを迎えて4者によるリーグ戦を行った。

注目のソビエト－ユーゴ戦は予想どおりの大激戦となったが、前半11－9と優位に立ったソビエトが、後半ユーゴの反撃をかわし優勝を飾った。

ユーゴ 21－18 ロシア
ソビエト 22－14 ウクライナ
ウクライナ 22－19 ロシア
ソビエト 20－19 ユーゴ
ソビエト 28－17 ロシア
ユーゴ 16－14 ウクライナ

【順位】①ソビエト②ユーゴ③ウクライナ④ロシア

ソビエト、チェコも降す
──トビリシトーナメント──

ソビエトにおけるビッグエベントの一つトビリシ国際トーナメントは11月25日から3日間トビリシ市で行われた。

今年の大会には、チェコが特別参加し注目されたが、ソビエトとの対戦では前半9－8とリードしたものの、後半主力のマレス、クラナトの不参加がひびいて逆転をきっし敗れた。

ソビエト 21－20 ジオルジー地方選抜
チェコ 15－10 ジオルジー地方選抜
ソビエト 20－18 チェコ

東ドイツが首位
──シユエリン国際大会──

シユエリン国際3ケ国大会は、世界選手権のダークホースと伝えられる東ドイツが順当にハンガリー、ポーランドを降し首位となった。

東ドイツ 23－13 ハンガリー
ハンガリー 21（分）21 ポーランド
東ドイツ 22－11 ポーランド

デンマークが優勝
──スカンデイナビア大会──

第1回スカンデイナビア国際室内選手権は1月2日から4日までマルモに4ケ国が参加して行われた。

優勝は予想どおりデンマークとなったが、緒戦でノルウェーに敗れ話題をまいた。

ノルウェー 16－12 デンマーク
スエーデン 14－10 フインランド
デンマーク 34－15 フインランド
スェーデン 17－15 ノルウェー
デンマーク 15－14 スウエーデン
ノルウェー 14－12 フインランド

【順位】①デンマーク②スウェーデン③ノルウェー④フインランド

グンメルスバッハら進出
──男子ヨーロッパ杯──

第11回男子ヨーロッパ・カップトーナメントは、9月からヨーロッパ22ケ国のチャンピオンチームを集めて各地で激戦を展開して来たが、世界選手権のため一時中断3月中旬に左記の組み合せで行われる。

▽ステアウァ・ブカレスト（ルーマニア）──ホンブト・ブダペスト（ハンガリー）
▽ディナモ・ベルリン（東独）──グラスホッパーズ（スイス）
▽FC・バルセロナ（スペイン）──R・ベルグラード（ユーゴ）
▽V・f・Lグンメルスバッハ──ツルド・モスクワ

予断許さぬ激突つづく

世界選手権で有力な優勝候補といわれる強国の最近の試合結果は次のとおり。ノルウエーが西ドイツを1点差ながら破ったのが注目される。

ルーマニア 16（6－6、10－7）13 東ドイツ
西ドイツ 18（9－12、9－4）16 デンマーク
東ドイツ 25（12－7、13－5）12 フランス
東ドイツ 28（14－6、15－13）19 フランス
ノルウェー 18（6－8、12－9）17 西ドイツ
アイスランド 17（8－9、9－8）17 ノルウェー

カナダ出場辞退

世界選手権のアメリカ大陸代表となったカナダは財政上の問題で1月18日、出場辞退を申し入れた。国際ハンドボール連盟(IHF)ではカナダの辞退を承諾するとともに、代りにスペインの参加を発表した。

しかし、このIHFの決定に対してカナダと代表権を争って敗れたアメリカが不満の意を表明しアメリカ大陸代表としての繰りあげ出場を強硬に申し入れている。

IHFがスペインを推したのは地域予選の敗者の中から同国をすでに"補欠第1位"と決めていたことによる。

辞退したカナダは、日本と同じ予選グループに入っていたものでチェコ、ユーゴー、カナダに関する情報を集め、対策をねっていた日本としても、出発直前だけに大きな影響をうけることになる。

東ドイツ、ルーマニア、女子でも躍進

――ルーマニア・カップ――

今シーズン女子のビッグエベントと注目されたルーマニア杯国際リーグは11月25日から19日まで7ケ国8チームが参加して行われた。

予選リーグ2組の同位同士による順位決定戦のスコアは次の通り

▽決勝
東ドイツ 14―10 ルーマニア
▽3位決定戦
ソビエト 22―15 ユーゴー
▽5位決定戦
チェコ 12―10 ハンガリー
▽7位決定戦
ポーランド 23―21 Bルーマニア

S・カウナスら進出

――女子ヨーロッパ杯――

第10回女子ヨーロッパカップは近く準々決勝に進むが、3連勝(注・前年は流会)を狙うシャルジリス・カウナス(ソビエト)をはじめSC・ライプチヒ(東独)、HG・コペンハーゲン(デンマーク)の強豪が順調に勝ち進んでいる。

このほか、西ドイツの強チーム・FC・ニュールンベルグが1回戦でマカビ・ラマルガン(イスラエル)を40―4、22―9という女子の国際試合には珍しい大差で連勝、またヨーロッパでは異色ともいえる学生単独のテイミソアラ大学(ルーマニア)が勝ち残っているのも注目されよう。

女子の国際試合

活況の男子に比べ女子の国際交流は目立った動きが少ない。

その中で、西ドイツとルーマニアが2連戦を行って

西ドイツ 10―8 ルーマニア
ルーマニア 12―7 西ドイツ

と互格に終ったのが注目される。

西ドイツ 11―5 オランダ
西ドイツ 11―2 オランダ
ノルウェー 9―5 スウェーデン
ノルウェー 10―6 スウェーデン

強豪順当に本大会へ進む

世界選手権 地域予選

2月26日からフランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権の地域予選は11月15日から12月7日までの間、世界各地で行われた。(一部既報)

今回の予選は当初11カードが予定されていたが、モロッコ、ポルトガルがいずれも棄権したため9カードとなり、それぞれホーム・アンド・アウェイ(2回戦制)で争われた。

その結果、各カードとも優勢を伝えられた強国が勝利を握ったが西ドイツ―オランダ1回戦が16―16の引き分け、アイスランド―オーストリア2回戦でオーストリアが21―20でアイスランドを破るなど小さな波乱もあった。また東ドイツ―イスラエル2回戦は11月29日クフルジラデで行われる予定だったが、イスラエル側が用意したコートの広さが38m×18mであったため東ドイツが対戦を拒否、国際ハンドボール連盟(IHF)もその抗議をうけつけ、イスラエルの没収負けとなった。

日本の対戦相手を決めるユーゴースペイン、カナダ―アメリカ戦は本誌既報のとおりユーゴカナダが連勝している。

ハンガリー 29 (14―5 / 15―6) 11 ブルガリア
ハンガリー 23 (11―7 / 12―8) 15 ブルガリア
ハンガリーが本大会へ出場

スイス 11 (6―3 / 5―7) 10 ルクセンブルグ
スイス 22 (10―8 / 12―1) 9 ルクセンブルグ
スイスが本大会へ出場

ソビエト 22 (11―4 / 11―6) 10 フィンランド
ソビエト 33 (16―5 / 17―14) 19 フィンランド
ソビエトが本大会へ出場

ノルウェー 26 (11―4 / 15―2) 6 ベルギー
ノルウェー 35 (14―0 / 21―6) 6 ベルギー
ノルウェーが本大会へ出場

アイスランド 28 (16―8 / 12―2) 10 オーストリア
オーストリア 21 (10―12 / 11―8) 20 アイスランド
1勝1敗だが2試合のトータル48―31でアイスランドが本大会へ出場

西ドイツ 16 (6―7 / 10―9) 16 オランダ
西ドイツ 22 (13―4 / 9―6) 10 オランダ
西ドイツが本大会へ出場

東ドイツ 35 (16―0 / 19―2) 2 イスラエル
東ドイツ 没収試合 イスラエル
東ドイツが本大会へ出場

ポーランド―モロッコはモロッコがアフリカ大陸代表を認めぬIHFの決定を不服とし棄権、スウェーデン―ポルトガルはポルトガルが自国で2試合を行いたいという主張をまげず棄権した。

※

日本の対戦を決める2カードのスコアは次のとおり

▼ユーゴ―スペイン1回戦(11月15日・パンセポ)
ユーゴ 28 (15―8 / 13―6) 14 スペイン
▽同2回戦(11月29日・ヴィゴ)
ユーゴ 26 (13―8 / 13―7) 15 スペイン
▼カナダ―アメリカ1回戦(11月16日・リビングストン)
カナダ 21 (10―10 / 11―7) 17 アメリカ
▽同2回戦(11月29日・トロント)
カナダ 18 (8―7 / 10―8) 15 アメリカ

(注)予選を免除されていた国は次の5ケ国。
フランス(開催国)、チェコ(前回優勝国)、デンマーク(同2位国)、ルーマニア(同3位国)、日本(アジア大陸代表)

月例常務理事会議事録抜萃

11月30日

一、昭和45年度の全日本選抜選手権のため12月16日～20日の5日間東京体育館の使用申しこみをした（理事長）

一、6月に予定される日韓学生の東京地区での試合は、駒沢（体育館又は屋内球技場）を使用する＝全日本学連・関東学連の意向。

一、世界選手権代表の遠征に関する旅行エージェンシーは「東急」とする（担当・渡辺副会長）

一、世界選手権代表の個人負担（主に旅行カバン、制服などの費用）は10万円の以内とし極力少額におさえる。

一、世界選手権代表に認定証を記念として贈ることを慣例化する（注）昨年流会となった第4回世界女子7人制選手権代表にもさかのぼって贈る。

一、日本協会財政の緊迫による打開策として次の諸点が話しあわれた。

イ、加盟金・登録金の値上げはやむを得ない。

ロ、用具検定料の値上げを業者へ要望する。

ハ、財政問題については財務部と財源検討委（委員長・嶋田常務理事）で早急に原案を作成する。

一、読売新聞社制定の日本スポーツ賞候補として大洋デパート、下関中央工高、新居浜市商高、日体大女子、大阪イーグルスがあげられたが、大洋デパートを第一候補、下関中央工を第二候補とし次回（12月21日）に正式決定する。

一、東海学連は45年度から西地区所属となる。

一、NHKTVの解説は全日本学生が荒川理事長、全日本選抜が村田強化対策委員長

月例常務理事会議事録抜萃

12月21日

一、第7回世界男子7人制選手権の日本選手団役員3、選手14人を承認、主将を竹野幸昭選手とする。

一、読売新聞社制定の日本スポーツ賞は、大洋デパートが全日本選抜で優勝の場合は同チームをそれ以外の場合は下関中央工高とする。

一、全国理事会を45年1月24日午後1時から、全国評議員会を45年2月1日午前11時からそれぞれ岸体育館(体協)会議室で開く

一、日本協会財政に関する新提案を全国理事会までに常務理事会として用意する。

一、45年度の国際試合として西ドイツ、ソビエトの招待を折しよう中だが具体化するまでにいたっていない。

月例常務理事会議事録抜萃

1月5日

一、世界選手権コーチ勝繁夫氏から、勤務先のやむを得ぬ事情で辞退したい旨の申し入れと陳謝があり了承。

一、勝コーチの補充は行わず、選手の補強もしない。したがって選手団は団長をふくむ16名とし竹野選手をコーチ兼選手とする

一、イタリア在住の河内鋭雄氏（前日本協会常務理事）又はスイス在住の渡辺俊夫氏（昨夏、訪欧選手団の渉外役員）に現地で選手団と同行してもらうよう連絡する。

一、日本協会財政問題について次の諸点を全国理事会へ提出する

イ、通常経費として最低百万円予備費を含め二百万円の増収が必要である。

ロ、増収のために用具検定料を75円（現行50円）、チーム登録金を一般・学生二千円（現行千円）、高校千円（現行六百円）にそれぞれ値上げし、機関誌広告料も35万円の増収を目標とする。

一、今秋の外国チーム招へいについて、西ドイツナショナルの来日は難しく、TSV・アンスバッハクラブから訪日の意志が伝えられている。

一、昭和44年度ベストセブン、全日本優秀チームの選こうは荒川理事長、若崎技術部長、村田強化対策委員長、安藤審判部長の4名が1月23日に行う。

一、男子ベストセブンは世界選手権代表14名のなかから選こうする

一、全国理事会、全国評議員会議案作成。

時評

日本協会は、ついに登録料などの値上げに踏み切ったようだ。

諸物価の高騰は、日本協会の経費にもはね返りこのままではその運営にも支障をきたすことがはっきりしたからである。

加盟金、登録料などの増額は好ましいことではない。理想は〝無料〟なのだ。

しかし日本ハンドボール界が発展を遂げるにはどうしても競技者、関係者からの経済的協力が必要であり、みかたをかえればアマチュアスポーツは、自らのお金の範囲で競技を楽しむことが最大の条件なのである。

日本協会の事業は、年毎に増大の一途をたどっている。それにつれて経費も膨脹してくる。

体協からの競技力向上費は文字通りミュンヘン・オリンピックを控えた競技力─トップレベルの向上にあてられ、そのほかの支出はすべて、競技人口の中から捻出しなければならない。そればかりか頂点強化は、体協補助だけではとうてい足りず、補助額と同じくらいの額をハンドボール界独自の〝力〟で集める必要がある。

この二、三年、日本協会の諸事業は、選手強化を除いては切りつめにつめて当たっている。

常務理事会や理事会を開くたびに「節約」が口にされる、と役員は苦笑するほどだ。

『断腸の思いで値上げ案を出す』とは田村会長、荒川理事長の弁だが、全国関係者も飛躍を前にしたこの苦境を察して協力が望まれる。

それと同時に、日本協会も、地方球界への物資的還元について考えるべきだと思う。底辺の理解を求めるのもよいが、底辺への理解を忘れぬことが先決だ。この機に日本協会が〝地方対策〟にも真けんにとり組むよう要望したい。

（X）

高校優秀選手を発表

全国高体連

日本協会と全国高体連ハンドボール部はこのほど『昭和44年度全国高校優秀選手』男女各15名を次のように発表した。

男女とも全日本高校、国体高校の二冠を得た下関中央工(山口)、新居浜市商(愛媛)からそれぞれ4名づつが推され、男子で全日本高校準優勝の中大附属(東京)の5選手が選ばれたのも目立っている。2年連続の推せんは男女を通じて山徳選手(下関中央工)一人である。また、例年に比べ2年生が6人(男3、女3)と多いのも注目されよう。

○…男　子…○

▽GK
山徳　辰雄(下関中央工・3年)
吉近　充洋(中大附属・3年)

▽FP
榎本宏太郎(中大附属・3年)
古畑　節(中大附属・3年)
上村　茂(中大附属・2年)
松下　清隆(中大附属・2年)
古谷　信幸(下関中央工・3年)
西島　勝(下関中央工・3年)
皆本　義典(下関中央工・3年)
永井　邦雄(富岡・3年)
戸井田　稔(神代・3年)
辺見　伸人(三原工・3年)
牧野　彰文(佐世保北・3年)
喜井　美雄(新居浜工・2年)

○…女　子…○

▽GK
石塚　裕子(秋田和洋・3年)
岩崎真理子(新居浜市商・2年)

▽FP
金村美代子(新居浜市商・3年)
田中かずみ(新居浜市商・3年)
大塚やす子(新居浜市商・3年)
高岡　英子(栃木女・3年)
大塚　恵子(栃木女・2年)
鈴木　栄子(秋田和洋・3年)
松岡　啓子(秋田和洋・3年)
小川真理子(室蘭商・3年)
市原みつよ(大分東・3年)
高橋　啓子(花巻南・3年)
北爪　玉江(前橋市女・3年)
金子　共栄(昭和学院・3年)
西田　恵子(広島一女・2年)

大洋デパートを推せん

日本スポーツ賞部門賞

日本協会は読売新聞社制定の第18回日本スポーツ賞・競技別優秀団体賞に大洋デパート(熊本)を推せんした。

全日本高校2連勝の下関中央工(山口)を推す声も強かったが、今年に入ってすべての全国タイトルを獲得し、抜群の攻守と洗れんされたマナーをもつ大洋デパートに決まった。同チームは昭和37年度(第11回)についで2度目の受賞。

総合役員会を〃濃縮〃

全日本学連　実質的な活動展開へ

全日本学連総合役員会(今年度第4回)は12月22日東京の体協会議室で行われ、三年来の懸案事項である学連規約改正について、4時間近い協議を行った。

その結果、改正の重大点とみられていた最高議決機関である総合役員会は、これまでのようなぼう大な定員(昭和44年度の定数=理事、委員　合計60名)ではとても実質的な活動はできないとして各学連1名の理事(OB)と2名の委員(学生)、それに会長推せん理事7名以内の計28名で構成することになった。

また、学連独自の企画の遂行、審判部、技術部の設置などが話しあわれ、新年度を期して積極的な運動を展開することになった。

このほか、今夏7月に来日が予定される韓国学生との交歓試合は5試合(関東2、関西、東海、九州各1)とすることを申し合せた。

【改正された全日本学連規約全文は次号に掲載の予定】

球界パトロール　全日本選抜の観客動員

○…参加チームをこれまでの半数男女各4チームにしぼり、ウィークエンド3日間をかけた昨冬の全日本選抜(東京体育館)は、初日から激しい優勝争い、トップチームの1点を争う激突といった競技面の充実に加え、大会運営面でも多くの注目が集った。大会人気のバロメータともいうべき、観客動員数を、総務企画部の集計にみてみると

	一般(含学生)	高校生	小・中学生(招待)	計
第1日	606	378	28	1012
第2日	981	663	65	1709
第3日	1630	1215	334	3179

○…今年もこの大会は日本協会の自主興行。1ケ月前からの前売り、三千枚の小中学生招待券配布など、その成果に望みをかけていたのだが、大会収支は若干の黒字を生んだものの定員五、〇二九人の会場は第3日が、六分の入りとなって熱気を満たしたほかは低調。コート上の白熱戦に応えるには寒々としていた。

○…これには協会役員も浮かぬ顔。どの試合もハンドボールの醍醐味を満喫するにたる好ゲームの連続であっただけに、改めて大会ムードの盛りあげが、反省の材料として次回へ持ちこされることになった。

11月なかばすぎからの一ケ月間に全日本対関東学生、全日本学生選手権、そしてこの大会とビッグゲームが重なり、便利はよいが、底冷えのする会場が敬遠されたといういみかたもあるが3日間で一万二、三千のファンを呼ぶには、いつまでも高校生だけをアテにするのではなく、もっと一般・学生ファンの開拓といった抜本的な対策を企らねばならないのではないか。

○…いわゆる高校OB、大学OBが意外に会場へ来ない。この層をいかに「ハンドボール」へ呼び戻すかも一つの解決策になろう。PR不足という批判もあるが、年末の大会としてすでに9年の実績を積み、報道関係も高い関心をよせてくれている

○…少年層への普及は、年毎に効果をあげているようだが、招待券配布枚数と来場者の比率はまだまだ低い。

しかし、少年たちが、世界選手権代表となった木野、野田、藤中らをとりまきサインを求める風景はかってないことだった。この芽をだいじに育てるべきだ「好試合を大観衆の前で」を机上論に終らせてはならない。

一般・学生２千円，高校千円に値上げ

全国理事会で決定　日本協会チーム登録料

事業の国際化、拡大化にともなって窮迫を余儀なくされている日本協会財政は、その打開策としてチーム登録料、用具検定料などの改訂（値上げ）を検討していたが1月25日東京で開かれた全国理事会は財務担当森岡常務理事、財政問題検討委員長嶋田常務理事からの説明をうけて値上げ案を議決、2月1日の全国評議員会の承認をまって昭和45年度から実施することになった。

改訂されたチーム登録料は
▽一般・学生二千円（現行千円）
▽高校　千円（現行六百円）
で、これによる増収額は約百三十万円と見込んでいる。

機関誌購読料千二百円、オリンピック基金百円はすえおかれ、一般チームの個人登録料（一人百円）も現行のままなので、新年度からの各チームの日本協会への基本登録経費は
▽一般三千三百円＋（百円×登録人数）
▽学生　三千三百円
▽高校　二千三百円
ということになる。

用具検定料については、用具一個につき現行50円を75円とする案が荒川理事長から各業者に示されたが、業者側は一個あたりの検定料よりも業者単位に基本公認料を設定して欲しいという意向が強く決定をみていない。

登録小数協会は加盟金半額

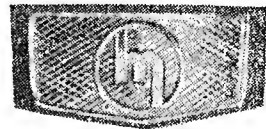
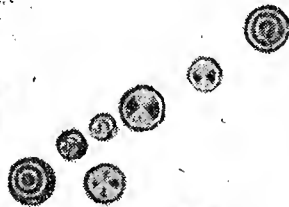
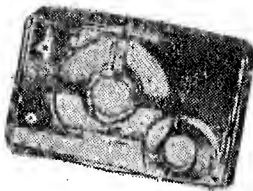
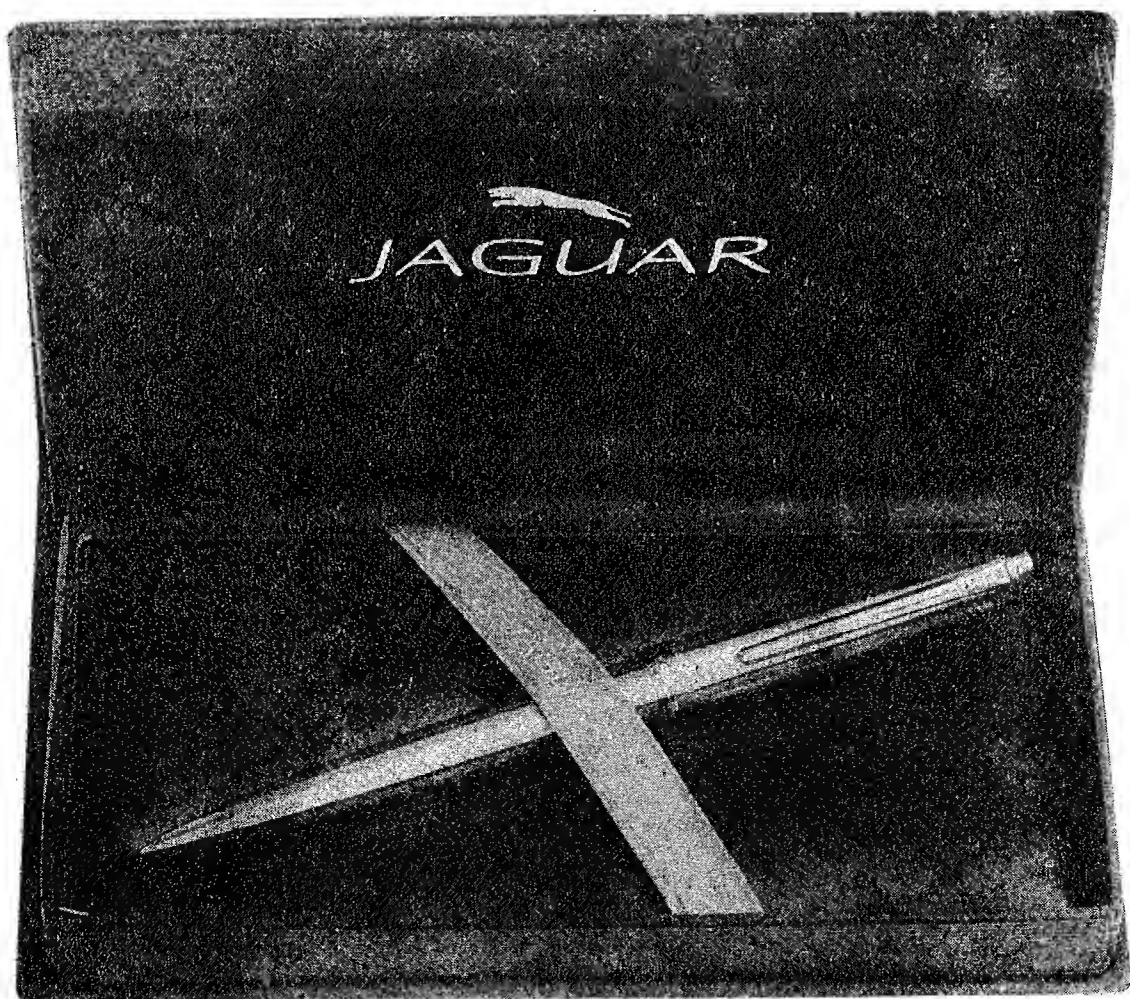
なお、都道府県協会の日本協会への加盟金は一律一万円だが登録チームが少ない都道府県協会には負担が大きく、昭和45年度から登録チーム数が10以下の都道府県協会は半額の五千円に減額することも全国理事会で決められた。

現在、この決定に該当するのは4協会である。

このほか、審判審査料（ライセンス取得時に納入）はこれまでどおりとなったが、新たにA・B級審判員は2年に1度、審判員資格更新料（三百円）を払う制度が設けられた。

8月に全国大会が集中

日本協会は45年度の各全日本選手権の開催期日を次のように内定した。2月1日の全国評議員会で正式決定される。

▽第2回全国自衛隊選抜（6月19、20、21日駒沢）▽第21回全日本高校（8月3日～8日彦根）▽第13回全日本教職員（8月14日～16日四日市）▽第25回全日本総合（8月18日～22日和歌山県打田町）▽第25回国体（10月10日～15日盛岡）▽第13回（女子第6回）全日本学生（11月下旬大阪）▽第17回全日本選抜（12月16日～20日東京）▽第11回全日本実業団（未定）。

JAGUAR

大崎電気（男子）8年ぶりの優勝

4強激突の第16回全日本選抜選手権

戦評・岡村昭二，佐野和夫，岡前義春，由利弘，小西博喜，大塚文雄

男女とも得失点差　大洋デパート、三冠を獲得

今シーズン活躍した男女4強による第16回全日本選抜選手権大会は12月19、20、21日の3日間東京体育館で熱戦をくりひろげた。

男子は全日本総合の最上位全立教（東京）、大崎電気（埼玉）、全日本学生界の二強日体大（東京）、中央大（東京）が参加。学生勢の健斗から息のぬけぬ試合がつづいたが、地力を示した大崎電気、全立教が最終戦に無キズで対決、2点をリードされた全立教が残り1分20秒間に驚異的な粘りで追いつくというまれにみる好試合を演じた末に引き分けた。大会規定により得失点差で僅かに上廻る大崎電気が8年ぶり2度目の優勝と決まった。全立教の2年連続のダブル・クラウン（全日本総合、全日本選抜）は成らなかった。

女子は有力とみられた大洋デパート（熊本）が初日に敗れる波乱の幕あけとなり、第2日を終って4者が1勝1敗で並ぶ大激戦。優勝のかかった最終日、前日まで栄冠へ最短距離にあった大崎電気（埼玉）が三菱鉛筆（神奈川）に惜敗、三菱は2勝したものの得失点差がマイナスに終わり、大洋―田村紡(三重)戦の勝者がタイトルを掌中にするという最後までもつれた展開となった。大洋デパートは最終戦で実力を存分に発揮して快勝、初優勝を飾るとともに、今シーズン全日本総合、長崎国体につづいて三つめの全国タイトルを獲得、2月の全日本実業団（名古屋）に勝てば宿願の〝四冠独占〟を遂げることになる。（観客数第1日＝一千、第2日＝一千六百、第3日＝三千）

年次優勝チーム

◎印は全日本総合（夏）との二冠

	男子	女子
①昭29	日体大	春日丘ク(大阪)
②	日体大A	日体大
③	全芝浦工大	日体大
④	日体大	半田高(愛知)
⑤	◎全日体大	寝尾川ク(大阪)
⑥	◎全芝浦工大	熊本ク
⑦	全日体大	熊本商大ク
⑧	大崎電気	◎愛知紡
⑨	全日体大	◎愛知紡
⑩	全日体大	大崎電気
⑪	全立教	田村紡
⑫昭40	芝浦工大	田村紡
⑬	◎全立教	◎大崎電気
⑭	芝浦工大	◎田村紡
⑮	◎全立教	大崎電気
⑯昭44	大崎電気	大洋デパート

①～⑪は全日本総合室内選手権と呼称

大崎―全立教、星分ける
中央大、日体大を降して3位

男子

全立教 22（16―7、6―6）13 中央大

【立教】得			【中大】得
尾形 0 / 馬渕 0	GK		望月 0
小野口 3	FP		喜田 1
江名 2			植木 1
木野 7			長広 3
北村 0			植田 4
野田 1			中野 0
加藤 1			佐々木 0
戸田 3			花輪 4
倉前 2			武部 0
有永 3			佐藤要 0
			佐藤光 0
22	(1)	7MT	(0) 13

（審・佐野、岡前）

スローオフから6分中大長広先取点、両チーム堅くなりがちなプレーのなかに中大のほぐれが早く植木の好パスワークによってリード全立教はベテランプレヤーを揃えながらコンビが合わず中途半端なプレーが多かった。しかし木野のリードで何とかタイにこぎつけて前半終了。後半、オープン攻撃に入った全立教は3分初めてリードしてからシャープさを加え、中大の守備陣を左右にゆする。対する中大の攻撃は全立教の1・5防禦が破れず無理なパス、ロングシュートがすべて全立教の逆襲につながってしまった。両チーム、メンバーチェンジを多用したが中大のパ

スワークの乱れに乗じた全立大の速攻は目覚ましく20分で20—10に引き離す底力をみせた。中大の敗因は、前半、全立教のコンビ不調の時に確実に得点しえなかったことと、後半リードされてからフォローがなく、攻撃にきれ目が生じたことが全立教に逆襲速攻をくうことになった。後半、1点リードのきっかけをつくってからの全立教のプレーは、これが前半コンビ不調に逆苦しんだ同チームかと見違えるようなすばらしい威力をみせた。（岡村）

大崎電気 18（9—5 9—6）11 中央大

	【中大】	得	【大崎】	得
GK	望月	0	下里	0
GK			福本	0
FP	喜田	2	井上	4
FP	植木	2	近藤	3
FP	長広	1	飯田	2
FP	植田	0	近森	2
FP	花輪	3	竹野	0
FP	佐々木	3	籏野	0
FP			東	4
FP			平岡	3

（審・由利、遠藤）

18（2） 7MT （1）11

大崎は前半、近森、東、近藤がよく走りセット、速攻からポイントをあげていた。中大もよく若さを利して、ゴール前の速い動きで応戦したが、大崎の長身ディフェンスにしばしばシュートをカットされ、前半9—5と中大はリードされた、後半に入って中大花輪が決めて追いあげたが、近藤、東、平岡らがよくポイントをあげ、後半20分、6点差にされた。中大はシュートが雑になり、ミスが多く、大崎に逆襲され差を大きくあけられた。終り近く大崎のトップ井上がよく走り、中大は佐々木がよく健斗していた。25分大崎はメンバーをかえて、ゆうゆうと対戦、楽勝した。中大はシュートが雑であったのと、もっとジックリ攻める必要が感じられた。大崎も、日本代表候補メンバーを多数参加させながら、パスのミス、シュートのミスが目立つプレーが見られたのは反省すべきである。（大塚）

全立教日体大に辛勝

全立教 16（10—9 6—6）15 日体大

	【日体】	得	【立教】	得
GK	本田	0	尾形	0
FP	井上	1	小野口	0
FP	谷藤	1	江名	2
FP	大川	1	木野	7
FP	笠原	3	北村	3
FP	藤中	4	野田	0
FP	斎藤	5	戸田	4
FP			有氷	0

（審・佐野、岡村）

16（2） 7MT （2）15

それぞれセットオフェンスの全立教と速攻型の日体と対戦前から激戦を予想された。全立教は木野小野口、江名とボールを左右に良く振り北村、野田をポストでブロックプレーをさせたのが成功したのと木野のフェントプレーで加点してゲームを有利に進めた。日体も藤中のシュートと速攻さらに思い切った飛び込みのシュートが良く決り食いついた。

後半に入るや日体はゲームの主導権を握り疲れの出た全立教に対し速攻のチャンスをつかんだが、シュートに余裕がなく尾形の好守にはばまれて加点が無く苦労したゲーム終了2分前まで2点のリードをしていた日体が逃げ切るかにみられたが続けて7MTを2本取られて逆転させられた。全立教も江名、野田に以前のようなプレーが見られず木野のみにたより過ぎたのが苦戦の原因であり、最後まで勝敗の判らない好ゲームであった。（由利）

大崎、日体大をよせつけず

大崎電気 14（6—3 8—6）9 日体大

	【日体】	得	【大崎】	得
GK	本田	0	福本	0
GK			下里	0
FP	井上	3	井上	2
FP	谷藤	0	近藤	4
FP	笠原	3	飯田	0
FP	藤中	1	近森	1
FP	塩崎	0	竹野	3
FP	斎藤	2	東	3
FP	亀谷	0	平岡	1
FP	氷海	0		

（審・岡村、大塚）

▽反則退場　日体＝谷藤　大崎＝井上

14（2） 7MT （1）9

長身選手を揃えセットプレーにうまみをつけて来た大崎に対し、徹底的に走りまくるスピードの日体大が如何にゲームを展開させるかに興味があった。速い動きから日体大は右45度井上が見事なシュートを決めて先制攻げきかけたが、大崎も近藤がすぐ右45度から決めタイにした。その後すぐ東が速攻からミドルを、ポストプレーから7MTを得て近藤と10分までに3—1と大崎がリードした。その後10分間、両チームミスやラフプレーが多くなり、やゝゲームは荒れ模様となったが、20分をすぎ、日体大は笠原、藤中が決め、大崎も東がゲット。前半終了近く井上のカットから独走、竹野の見事なシュートで6—3で前半終了した。大崎は日体大の速攻をよくおさえ、逆にセットではコンビのあった動きで主導権を握った日体大も、セットでよくチャンスをつかんだがシュートが決まらず苦戦した。後半に入り、すぐ日体大は斎藤が決めて反撃の態勢を見せたが、5分から10分に大崎の竹野、近森、近藤に決められ差をつけられた。その後日体大はミスが多くなり、20分まで7MT1本という雑なゲーム運びとなった。大崎も同様、動きが悪くなり、ただ両チームの防御のラフさが目立つゲームとなった。20分を過ぎて、日体大は本来の脚力にものを言わせて走り、見事な速攻から攻撃したが、大崎も日体のミスをついて加点し逃げきった。両チーム共勝敗にこだわりすぎ、防御面でボールに対するプレーを忘れたラフプレーが見られたことは残念だった。（佐野）

中央大 12（8—3 4—6）9 日体大

	【日体】	得	【中大】	得
GK	本田	0	望月	0
FP	斎藤	2	喜田	0
FP	亀谷	0	植木	0
FP	安達	3	長広	1
FP	氷海	1	植田	3
FP	松原	0	花輪	5
FP	高橋	2	佐々木	2
FP	岩下	1	佐藤要	0
FP	井上	0	佐藤光	1
FP	笠原	0	小川	0
FP	藤中	0	武部	0

（審・小西、岡村）

▽反則退場　中大＝佐藤光

12（2） 7MT （2）9

11月全日本学生選手権大会で顔を合せたばかりで、両チーム共に速攻を武器としているだけに、その攻防に期待されたが、主力選手を抜いての対戦となって凡ミスが目立ち学生同士の目まぐるしいほどのパスワークが見られず興味が消えた感がした。中大は花輪のオールラウンドからのシュートと植田の左腕を生かしたするどい切込みのシュートで前半をリードした。後半日体大の守備がまとまり攻撃に集中出来るようになったもの前半の差をちぢめることができず中大の前に屈した。日体大は主力選手を抜いたため速攻を生かしきらずい練習量不足も敗因と思われる。（岡前）

終了5秒前に同点

大崎電気 14（9－8 / 5－6）14 全立教

引き分け

【立教】	得		【大崎】	得
尾形	0	GK	下里	0
小野口	2	FP	井上	1
木村	2		近藤	1
北野	4		飯田	5
野田	5	（審・佐野・岡前）	近森	2
戸田	0		竹野	1
倉前	0		東	2
有永	1		平岡	2
	14（0）	7MT	（0）14	

優勝をかけた一戦は大崎のスローオフで開始。1分近森が右45度のミドルロングをきめたが、全立大の野田がたて続けにうった右サイド一杯からのシュートが見事にきまり、また速攻から小野口が決めて3点。しかし、5分、12分に大崎飯田の中央と竹野の左45度のポストからのポイントでタイとなった。全立大は昨日の試合で頭部打撲した江名にかわり長身有永が出場し、ポイントゲッター木野は終始井上による徹底したマークがとられたため、野田、小野口を最大限に使う戦法にでたが非常に苦しそう。3対3になってから6分間はこう着状態。この間尾形、下里の両GKはよくシュートを防ぎ好プレーをみせた。18分から22分にかけて大崎が4点をとれば23分から28分まで全立大が4点を返すという試合の展開。しかし、ゲーム内容は個人技を生かしての攻防でブロックとロングシュートは余り有効につかわれず、クリーンプレーの少ないのはさびしかった。

後半15分までは、数少いチャンスを大崎が得点したのに対し、全立大は6分野田の得点のあと7MTを落したためか、なんと23分まで17分間無得点。全立大のミドルシュートは殆んどクロースバーを越すことも大崎守備陣の長身の壁のためか。しかし23分、速攻から木野が決め3点差につめてからの攻撃は目覚ましく、木野、北村、野田と息をのむようなクリンプレーで追いこみ、タイムアップ寸前野田が右サイドから劇的なポイントをあげてタイとなり終了した。

大崎は得失点差で1位となったが、多くのロングシューターを擁しながらもっとロングシュートを利用していたら試合を楽に進められたのではなかろうか。また全立大の木野を完全にマークしポイントを最少限に押えた井上の健斗も賞されよう。

さらに右45度からのミドルシュート、ここからポストにおとしてのポストプレーが良く決まった。全立教は木野がマークされたことと江名を負傷でかいたのが何といっても大きく、ことに攻撃面の木野、守備面の江名が充分に使えなかったことは大きく勝敗を左右するポイントなった。

結局、昨日まで、不調と見られた北村、野田がよくこれをカバー得点をあげ、辛じて引き分けにもちこんだ。またもう一つこの試合をもりあげたのは両GKの好守である。決勝を争うにふさわしい好試合であった。（岡村）

大洋、初日に敗れる波乱

激しかった星のつぶし合い

女子

三菱鉛筆 9（3－4 / 6－3）7 田村紡

【田村】	得		【三菱】	得
渡辺美	0	GK	吉田	0
三毛	2	FP	蓮見	6
若林	0		鈴木	0
小林	3		江川	1
渡辺信	1	（審・由利・遠藤）	小田島	1
金田	0		姫野	0
辻	1		八重樫	0
広森	0		阿保	1
	7（1）	7MT	（1）9	

田村は立ち上り3分、渡辺が左サイドからのポイントで先行したが、三菱は中央攻撃にかたより、パスのつなぎもわるく得点に結びつかず、一方田村は13分に7MTを決め、17分、22分と着実に加点しかし三菱も蓮見を中心に着々と追いあげ4－3で前半終了。

後半は、互いにシーソゲームをくりかえしたが、三菱は、蓮見のフリースローからの得点が決り、ロングシュートも折りこみ接戦の末9－7で逆転勝ちした。それに田村のデフェンスが後半甘く、三菱のとびこみシュートを3本も許した無策は一考を要する。

また三菱も7MTを4本もはずしたミスはうなづけなかった。（小西）

大崎電気、走り勝つ

大崎電気 11（5－1 / 6－5）6 大洋デパート

【大洋】	得		【大崎】	得
小原	0	GK	山田	0
垂水	1	FP	小林	4
米	0		木幡	2
渡辺	4	（審・小西・柏崎）	三浦	0
三宅	0		山崎照	3
枝尾	1		寺尾	0
島田	0		荒川	0
			加藤	2
	6（0）	7MT	（1）11	

▽反則退場　大崎＝三浦

前半身長の大きい大洋に対して大崎は逆サイドからポストにカットインし、チャンスを作り、手だけで出足の少い大洋のデフェンスをロングシュートとカットインプレーを使い分け5点を得点したのに対し、大洋はロングシュートがさらに数回ゴールポストにあたったり、さらに数回攻撃のパスとシュートのタイミングがおくれ、大崎のデフェンスの手中に落ち、プレーが止り、チャンスを作ることが出来ず、12分カットインプレーからの1点だけであった。

後半大洋は早い足で追上げ得るかに見られたが大事なところで7MTを落したりしたあせりからかシュートが単調になり、それが大崎の速攻を誘発した。ノータイム7分前から一方的な大崎のペースになり勝敗を決定ずけた。

大崎の走りが大洋を上廻り、又前半の差が大洋のあせりとなった。（由利）

田村、前半の有利生かす

田村紡 7（4－1 / 3－3）4 大崎電気

【大崎】	得		【田村】	得
山田	0	GK	渡辺美	0
小林	1	FP	三毛	2
木幡	0		若林	1
三浦	0		小	2
要林	0	（審・柏崎・小西）	渡辺信	0
寺尾	3		金田	0
早川	0		辻	2
加藤	0		広森	0
	4（1）	7MT	（2）7	

両チーム試合開始直後は身体が温たまらなかったのか動きがにぶく、ミスが見られたが、田村紡の動きが早く調整がとれると次々と小林のサイドからのシュート、若

林のカットから単独での中央シュートが各々決まり、続いて小林のカットプレーで7MTを誘いリードした。大崎は田村のキャッチミス2本を速攻したが、いずれも最後までパスをつなぎきらずチャンスを逸した。田村紡の守備はつぶしが早く大崎の攻撃ミドルシュートが打てず、又田村のGKの好守にあって1点だけで前半を終る。

後半になって田村のポストプレーと大崎の速攻で相互にゆずらぬゲームを展開したが前半のチャンスを幾度も逸した大崎はその差をつめきらず、田村のロング、ポストカットープレと多彩な攻撃の前に敗れた。大崎の攻撃は動きが鈍くポストの動きとのタイミングが合わず、ゴールエリアまで入ってのシュートにこだわって決定的な、ミドルシュートが打てなかったのが敗因と思われる。

ゲームの主導権はやはり得点のチャンスを確実に決めなければならないことを表わしたゲームであったとも云える。

（岡前）

【男　子】

	大	立	中	日	P	得	失
①大崎電	…	△	○	○	5	46	34
②全立教	△	…	○	○	5	52	42
③中央大	●	●	…	○	2	36	49
④日体大	●	●	●	…	0	33	42

【女　子】

	洋	三	大	田	P	得	失
①大洋デ	…	○	●	○	4	26	21
②三菱鉛	●	…	○	○	4	20	22
③大崎電	○	●	…	●	2	22	21
④田村紡	●	●	○	…	2	21	25

Pはポイント＝勝2，分1，負0

得点5傑（本誌調べ）

○……男　子……○

	氏名	所属	得点
①	木野	全立教	16
②	花輪	中大	12
③	東	大崎電	9
④	斎藤	日体大	9
⑤	近藤	大崎電	8

○……女　子……○

	氏名	所属	得点
①	渡辺	大洋	11
②	蓮見	三菱鉛	10
③	小林	田村紡	9
④	垂水	大洋	7
⑤	小林	大崎電	5
⑤	三毛	田村紡	5

大洋、立ち直り示す快勝

大洋デパート 8（3—1／5—2）3 三菱鉛筆

【三菱】	得		【大洋】	得
吉田	0	GK	小原	0
蓮見	0	FP	垂水	3
鈴木	0	FP	米	0
江川	1	FP	渡辺	4
小田島	1	FP	三宅	0
姫野	1	FP	枝尾	1
八重樫	0	FP	島田	0
阿保	0	FP		

（審・大塚　岡前）

8（1）　7MT　（0）3

▽反則退場　大洋＝渡辺

両チーム互いにゆるいローリングパスで相手のスキを伺う慎重な攻めでスタート。10分三菱小田島が中央ポストから倒れこんでゴールをきめたが、すかさず大洋も枝尾が11分にフリースローから続いて、13分垂水がカットボールを単身ドリブルでゲット。さらに19分にも渡辺が右45度よりカットインでシュートをきめて難なく3—1と引き放した。大洋の動きのよい攻防に比べ、三菱はフリースローも弱気になって姫野、蓮見が打てず、個人技のゆさぶりフェイントのみではつぶされてしまう。どうしようもない感じた。

後半、三菱は6分姫野が10米位からのロングをきめたが大洋も7MTを得て4—2とリード、8分三菱は貴重な7MTをはずしたが大洋渡辺の退場中に追加点をあげ1点差につめよった。しかし大洋も16分垂水、19分渡辺がクリーンシュートを放ってゲット、さらに20分、22分に垂水がダメ押し点をあげて大きくつき放した。三菱は姫野が途中から交代し、きめ手を欠き大洋のしつようなデフェンスが破れず勝機を逸した。それにしても大洋が先手をとり、デフェンスのツメのよさが印象的であった。

（小西）

蓮見、劇的なサヨウナラFT

三菱鉛筆 8（3—3／5—4）7 大崎電気

どちらも一勝一敗同志でわずかに点差で大崎が上廻っている好カードの対戦であった。前半互に相手の動きを知りつくした堅いディフェンスに攻撃の糸口がつかめず攻めあぐんだ。中盤から三菱は姫野。蓮見がロングを操り出せば大崎も速攻を多発したが、帰陣の早いデフェンスと凡ミスから得点に結びつかなかった。三菱は小田島蓮見と姫野の7MTでリードし、ゲームが進められた。しかし、前半終了2分前大崎の早川の一点と寺尾の7MTで追い上げ3—3の振り出しにもどって終了。

後半なかば姫野の膝の故障退場と不運の三菱は蓮見を使っての強力な武器であるフリースロー作戦と7MTで得点をすれば、大崎は荒川、三浦と得点した、一点リードで三菱の勝ちが決ったかに思われたが、大崎は小林のシュートが決り同点となった。

三菱のスローオフからのボールを反則した大崎に対しノータイムのホイッスル後、蓮見のフリースローがゴールインして劇的な試合終了となった。

（由利）

【大崎】	得		【三菱】	得
山田	0	GK	吉田	0
小林	0	FP	蓮見	4
木幡	1	FP	鈴木	0
三浦	3	FP	江川	1
栗林	0	FP	小田島	2
山崎照	0	FP	姫野	1
寺尾	1	FP	八重樫	0
早川	1	FP	阿保	0
荒川	1	FP		
加藤	0	FP		

（審・大塚　柏崎）

8（2）　7MT　（1）7

田村紡追撃実らず

大洋デパート 12（7—2／5—5）7 田村紡

【田村】	得		【大洋】	得
渡辺美	0	GK	小原	0
三毛	1	FP	垂水	3
若林	0	FP	米	2
小	4	FP	渡辺	3
渡辺信	0	FP	三宅	0
金田	0	FP	枝尾	2
辻	1	FP	島田	1
広森	1	FP	小林	0
		FP	蔵田	1

（審・由利　大塚）

12（2）　　（2）7

最終ゲームで優勝が決るとあって、両チーム少し緊張気味ではあったが、大洋は1分垂水が7MTを決めてからは大洋ペース、速攻で一気に7—1とリードを奪った。これに反して田村は攻撃がつまりすぎ、小林がマンツウマンでつかれて、パスがつなげず、無理なシュートを連発し、大洋のワンサイドゲームとなり、7—2で前半を終了。後半田村の反撃が期待されたが、大洋の速い帰陣とつぶしにあって得点出来ず、善戦はしたが、前半の大量差はついにつめることができなかった。

大洋はこの一戦に勝てば本年三大タイトルの獲得がかかっており動きにも気迫がみなぎりのびのびとプレーし、メンバーチェンジもしばしば行なう余裕のあるゲーム運びで王者の貫録を示した。

緒戦を大差でおとしたが、その後見事に立ち直り、逆転優勝した大洋デパートの気力は賞讃に価しよう。

（小西）

☆　☆　☆

今回の４チーム総当りは初日から熱戦が展開され、見る者の眼を十二分に楽しませてくれた。しかも男女とも得失点差で優勝が決るというかってない激烈な戦いとなり、４チーム総当り制はまずは成功と云えよう。

観客動員もまずまずではあったが、東京体育館を連日超満員にしようという協会側の願いとはほど遠かった。

文字通り個々のトップレベルの男女チームを集めての戦い、しかも場所は日本一の人口密集地域の東京。条件は十分に揃っているのに、この程度の観客動員しかできないのはきわめて淋しい。

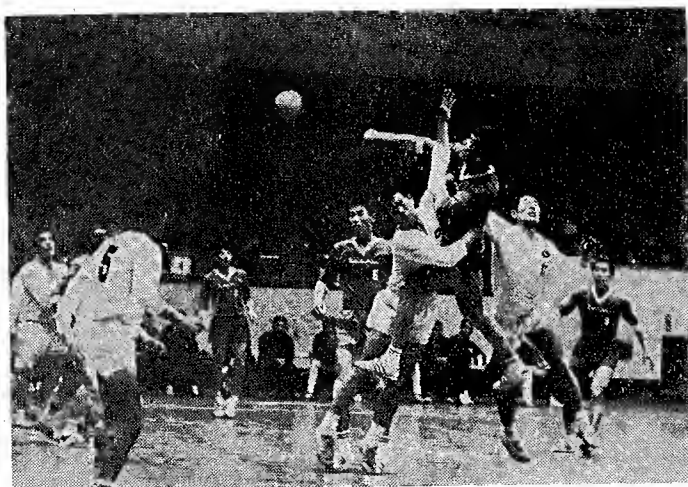
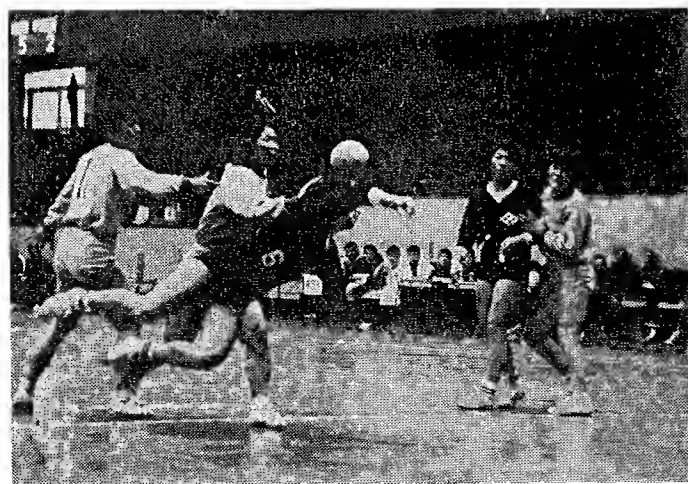
本年は入場券その他の手配も昨年に比べ、かなり順調にスタートしていたにも拘らず、この程度とは……。ハンドボール人口はまだまだある筈である。なんとかしてこれらのハンドボール人口を一度でも、会場に来てもらうようにするにはどうすればいいか、これが今後の課題となろう。

４チーム総当りという今回の方法は期間も三日と従来の五日に比べると適当と考えられるし、今後とも、この方法ですすめていくべきであろう。

トーナメント制よりも、ころいった形の粒よりのチーム同士による総当りリーグ制は毎日々々、対戦相手がかわり、異った相手に対し異った戦法が見られるといった点でも見応えのある大会であった

斯界もそろそろ〝普及〟から〝内容〟への脱皮を心がける時機に来ている。その意味でも今大会の競技面での活況全日本総合など全日本各大会の再検討問題に一つのヒントを与えたいといってもよいだろう。

（観戦子）

大崎電気―中央大学

田村紡―大崎電気

全立教―日体大

4冠王成るか大洋デパート 女子

全日本実業団選手権 (2月7日〜11日 名古屋市)

第10回を迎えた全日本実業団選手権は2月7日から11日までの5日間、名古屋市の愛知県体育館と名古屋市体育館に全国から男子40、女子6チームを集めて開かれる。

年々質量ともに充実の男子は初の試みとして前回の上位8チームによるリーグと、他の32チームによるトーナメントの二部に分け競技を行う。

女子は、大洋デパート(熊本)の史上3度目の〝4冠王〟がかかっており、見のがせない大会となっている。優勝の行方を探ってみよう。(編集部)

大崎電気(男子)主力欠き混戦か

初優勝狙う三景、常盤

▼男子リーグ　いわば1部リーグ。1年前の成績とはいえ現在実業団の最上位にある8チームの激突だけに、高レベルの内容が期待できそうだ。特に常勝・大崎電気(埼玉)が主力6人を世界選手権代表へ送ったあとだけに優勝争いの面白味もある。これまで9回の大会はまったく大崎の独走に終わっており、勝敗的興味がうすかったのだが、今回はもつれる可能性も充分にあろう。準決勝リーグのあと2組の上位2者によって、決勝リーグ、下位2者によって5—8位リーグが行われる。

10連勝をめざす大崎は、惜しくも世界選手権代表にもれたGK福本、平岡、井上の三人を中心に西村、旗野、佐藤、谷口といった布陣。留守軍とはいえいずれもトッププレイヤーだけに優勝候補の最右翼であることは今年も変りないただ、相手に与える威圧感の低下は否めまい。

特に山田、中島、高橋、安井、丹羽、GK渡辺らスキのない攻守を誇る常盤工業(岐阜)、米沢、正本、大山の法大トリオと永島を攻撃の軸に進境を伝えられる日進商会(神奈川)が斗志満々。久しく低迷していた千代田印刷機製造(千葉)も城、梅崎、山中、近藤らでこの大会をカムバックのきっかけにしたいと意欲的だ。

一方のグループも実力伯仲。三景(東京)、住友化学菊本(愛媛)は初優勝を狙える実力をもつ。ただ、三景はリーダー江名を世界選手権へ送っている。GK尾形、内藤、高梨、榊、山原、竹村らの若さと巧さをミックスさせた試合展開が江名を欠いて存分に発揮できるかどうか。

住友化学は、国体では精彩を欠いた。エース加藤がマークされたあとの動きがカギ。長岑、落海、白石、金剛、GK季原ら粒揃いで一月末の西日本選手権に優勝した勢いを見たいもの。

上り坂、ホームコートの利をもつ富士製鉄名古屋(愛知)は、高橋、黒岩、杉野、日光ら好選手を揃えているが、試合運びがもうひとつ甘い。地元の声援に張り切れば大きな波乱をよびおこそう。日本鋼管京浜(神奈川)はメンバーはほとんど変わらぬが去年ほどのスピードに欠ける。

順当ならば決勝リーグへ勝ち残るのは大崎電気、常盤工業、三景住友化学菊本とみたい。

準決勝リーグの大崎—常盤戦が一つのヤマで、それに三景がからむことになろう。

大崎のチーム力がどの程度なものになるかも一つのポイント。弱体が想像以上だと大混戦におちいりそうである。

有力な本田技研 日新製鋼呉

▼男子トーナメント　今回の場合二部的な存在だがレベルアップ著しい実業団球界、このトーナメントだけでも充分〝選手権〟になり得よう。精鋭揃いで予断を許さないが日新製鋼呉(広島)日本碍子(愛知)、宗形製作所(大阪)、自衛隊勝田(茨城)、セントラル自動車(神奈川)、本田技研鈴鹿(三重)、大成プレハブ(東京)、大同製鋼(愛知)がベストエイト候補。

これを追って日本鋼管福山(広島)、三菱レ大竹(広島)、丸善石油下津(和歌山)、富士レジン(兵庫)らがあげられる。

さらに上位へしぼると国体3位の本田技研、全国自衛隊選抜の勝者・自衛隊勝田、日新製鋼呉、大同製鋼あたりか。

本田技研は、テクニシャン大下を要に小川、末岡、岩本、星野、GK南とトップクラスの布陣。慎重に戦えば優勝最短距離。自衛隊

勝田は体力に秀れ、下茂、松木ら若さにあふれる日新製鋼呉は上り坂の好チームだ。大同製鋼は切り札・野田が世界選手権代表になって出られない。このマイナスをどうカバーするか。

このほか大阪ガス（大阪）川崎重工、神戸製鋼(兵庫)安田生命（東京）、京都信用金庫（京都）らに注目したい。

激しい競争・対抗意識

▼女子リーグ　大洋デパート（熊本）、田村紡（三重）、大崎電気（埼玉）、ブラザー工業（愛知）、東京重機工業（東京）、大洋紡（岐阜）の6チームが総当り戦を行うなんといっても注目されるのは大洋デパートの試合ぶりだ。

今年度すでに全日本総合（8月）長崎国体（10月）、全日本選抜（12月）と三大タイトル獲得、この大会に勝てば愛知紡（39年度）、田村紡（42年度）につぐ史上3番目の四冠王を飾ることになる。

12月の全日本選抜では初日大崎に不覚の一敗を喫したものの、立ち直って優勝した。「この1敗はよい薬」（井監督の話）というあたり自信のほどがうかがえる。

周囲の関係者も、大崎戦の苦汁は、むしろ飛躍をとげるためにはよかったというみかたを強くしている。

枝尾を要に、垂水、渡辺の左右両エース、三宅、島田らによるシャープな攻撃力は一頭地を抜く存在であり、GK小原を中心とした巧みなフットワークで厚い壁を布いている。

「スピードにあふれた豪快なスケールのチームにしたい」（井監督）という目標が着々と達せられている。

大洋デパートの連勝に立ちふさがるとすれば、やはり田村紡と大崎電気だろう。

田村紡は小林、GK渡辺美と攻守に柱となる名手が健在。両者のリードで三毛、若林、渡辺信、金田、辻、広森らが成長している。往時まではいかぬがキビキビとしたクイックプレーも上向きで、四冠王の先輩チームとしての面目もあり、斗志が期待される。

大崎は、チームの若返りから試合ぶりに波がある。それだけに調子さえつかめば大きな波乱をまきおこそう。小林、木幡、栗林らに三浦、加藤が進境を示している。GK山田も堅実だけに、攻撃力が好調ならば大洋デパートも油だんできまい。全日本選抜につづきこの大会もベテラン早川が加わる。

この3者を追うのは東京重機工業とブラザー工業。ともにチーム力は充実しており、3強の一角に食いこもうと意欲も充分である。

東京重機工業は攻守に鋭さが増し、上位との差は紙一重。緒戦で手の内を知った大崎を食うようだと一気にとびだすことも考えられる。ホープ牧野、滝野、鷺谷、島田、長谷川を主力に、新人村上、古佐原らもいい。GK川本の堅守は定評がある。

ブラザー工業もよくなっているホームコートでもあり勝ち進みたいところだ。五十嵐、朝倉、皆川松原ら守りの強さに比べ攻撃にあと一押しが欲しい。中野（元大崎電気）の加入は大きなプラス。

2年目を迎えた大洋紡はかなりまとまって来た。総勢9人と手駒に不足はあるが真田、平野、鞍富森本、GK高田ら主力は元気いっぱいである。

しかし、他チームとのあいだにはスピードで差があり、この大会での経験が来シーズンどう活かされるか。

来年は世界女子選手権の年、オリンピック採用もいぜん望みを残している女子界だけに国内最上位6チームの激突はたがいに激しい競争・対抗意識も手伝って目のこえた東海のファンを満足させる好試合が連続しよう。

なお、三菱鉛筆（神奈川）は欠場するが、昨冬の全日本選抜を最後に部活動を休止したとも聞く。

事実ならば、多くのスタープレイヤーをかかえたトップチームだけに、あまりにも残念なニュースである。

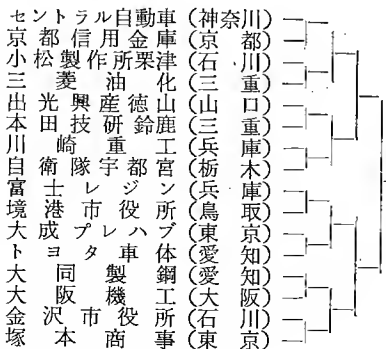
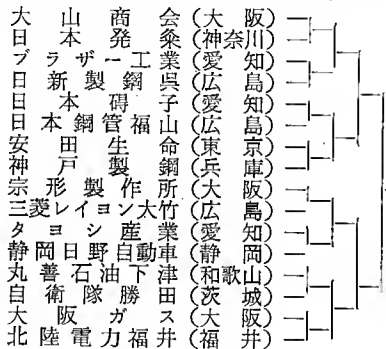
▼男子高松宮杯リーグ（8チーム）

▽1組　大崎電気（埼玉），常盤工業（岐阜）
千代田印刷機製造（千葉），日進商会（神奈川）

▽2組　三景（東京），住友化学菊本（愛媛）　富士製鉄名古屋（愛知），日本鋼管京浜（名古屋）

▼日本協会杯トーナメント（32チーム）

大山商会（大阪）
日本発条（神奈川）
ブラザー工業（愛知）
日新製鋼呉（広島）
日本碍子（愛知）
日本鋼管福山（広島）
安田生命（東京）
神戸製鋼（兵庫）
宗形製作所（大阪）
三菱レイヨン大竹（広島）
タヨシ産業（愛知）
静岡日野自動車（静岡）
丸善石油下津（和歌山）
自衛隊勝田（茨城）
大阪ガス（大阪）
北陸電力福井（福井）

セントラル自動車（神奈川）
京都信用金庫（京都）
小松製作所粟津（石川）
三菱油化（三重）
出光興産徳山（山口）
本田技研鈴鹿（三重）
川崎重工（兵庫）
自衛隊宇都宮（栃木）
富士レジン（兵庫）
境港市役所（鳥取）
大成プレハブ（東京）
トヨタ車体（愛知）
大同製鋼（愛知）
大阪機工（大阪）
金沢市役所（石川）
塚本商事（東京）

▼女子高松宮杯リーグ（6チーム）

▽第1日（2月7日）
大洋デパート—大洋紡績
田村紡—ブラザー工業，大崎電気—東京重機

▽第2日（2月8日）
東京重機—ブラザー工業
大崎電気—大洋デパート，大洋紡—田村紡

▽第3日（2月9日）
大洋紡—大崎電気，田村紡—東京重機
ブラザー工業—大洋デパート

▽第4日（2月10日）
ブラザー工業—大洋紡
大洋デパート—東京重機，大崎電気—田村紡

▽第5日（2月11日）
東京重機—大洋紡，ブラザー工業—大崎電気
大洋デパート—田村紡

ルブキングの横顔

得点王ルブキング。よく聞く名前である。本誌も4年前に彼の名前をチラリと出して紹介したことがあります（33号15頁）。その時には、彼は国際試合の総得点がまだ歴代2位で198点しかありませんでした。その後の4年間、彼の得点はうなぎ上りに上り、ついに523点（1969年10月25日まで）の大量得点を真の意味の国際試合であげています。おそるべき選手に成長したものです。

今度の世界選手権でも大活躍が期待される彼の横顔をここで見てみましょう。

1941年10月23日生れといいますから、第二次世界大戦のまっただなか、ドイツが調子よく、周囲を侵略し、日本もほどなく参戦する頃です。

28才の若さ。まだまだこれから、どんどん得点をふやしていくことでしょう。

学校でもハンドボールをやり、やがて、グリュン・ヴァイス・ダンケルセンのジュニアチームに入り、ここで大活躍をしていました

彼の公式試合への最初のデビューは18才になってから3日目の1959年10月25日でした。18才になって正式の試合に出られるようになって、すぐに試合に出場したというのですから、いかに彼の資質が期待されていたか判りましょう。

最初の試合はウエストファーレンの上部リーグ（この頃はこれが各地にあり、トップクラスのリーグであった。国内リーグは当時はまだ成立していなかった。）でゲーベルスベルグとの試合でした。この試合でルブキングは4点をあげ、彼のとてつもない得点を重ねる第一歩を踏みだしたのです。

つづいて、一週間もたたない、10月の30日には、7人制の試合に登場して、4点の得点をあげています。

ドイツの選手は11人制が得意とか7人制が得意とかの選手が多くルブキングのように7人制でも11人制でも、バリバリ得点をかせぐ選手というのは数少ないのです。

ナショナルチームの選手でも、7人制でもあれ、11人制でもという選手はなかなかいないのです。

ルブキングはナショナルチームの選手としてはもちろんですが彼の所属するグリューン・ヴァイス・ダンケルセンの選手として、多くの得点をあげており、グリュン・ヴァイス・ダンケルセンに多くの栄冠をもたらした

このグリューン・ヴァイスというチームはどちらかというと11人制が得意のチームであり、68年にヨーロッパカップの11人制が設立された後は、68、69年のチャンピオンになっています

そのほか、ルブキングが昇格して以来、ドイツのチャンピオン準優勝者になっていますが、7人制のほうは、国内リーグには入り、上位にはいますが、どうもそれ以上のことはありませんでした

ルブキングの国際試合のデビューは非公式なものとして、まず1961年5月17日にウイーンで行なわれたオーストリアとの国際親善試合に出場したことでした。

同年に2度ナショナルBチームのメンバーとして、スウェーデンBチームと対戦し、更に1962年始めには、スイスBと対戦してこの三つの試合で、23点をたたきだしています。

最初のナショナルAでの試合はユーゴーと

1962年1月20日ミュンヘンにユーゴーチームを迎えた時はじめて、ナショナルAチームの一員として登場し、6点をあげました。

つづいて、1月24日には、ミュンスターでノールウェーと対戦したナショナルAチームの一員にもなり、ここでも6点の得点をしました。

同年6月ロエルモンでオランダと対戦したとき、11人制のナショナルチームの正式の一員として、4点の得点をあげている。

ナショナルAとして、デビューして、一年しかすぎない1963年1月16日に行なわれたバーゼルでのスイスとの試合で10点をあげ国際試合での総得点は57点（室内45、屋外12）となり、僅か10試合で50得点以上をあげてしまいました。これが一〇〇点となると更に早く、同年の11月13日にキールで行なわれたスペインとの試合で、12点をあげ、105点になりました。僅か18試合、デビュー後20ヶ月で100点以上の得点をあたのです。このスペインとの試合で1試合に12点あげたのが、国際試合最高の得点となっています。

その後も着々と得点を積み重ね1964年6月7日のスイスとの試合で12点をあげ、フィールドハンドボールでの最多得点の記録を作りました。

10年間に98の国際試合に

昨年の10月25日、デビュー以来10年間に、ルブキングの出場した国際試合は98の多数に及んでいます。このうち50の試合というから

ほぼ半分の試合でドイツの得点王になっています。

11人制ハンドボールでは、1962年のロエルモンにおけるオランダの試合にはじまり、昨年7月5日のオッフェンバッハのスイス戦までの17試合にナショナルAチームのメンバーとして登場し、98点をあげています。

この間のドイツの総得点が397点ですから、四分の一近い得点をルブキングがあげ、一試合平均5点以上をとっているのですからいかに彼の得点力がすぐれているかが判りましょう。

また7人制では、この間に81試合に登場し、425点をあげています。この81試合のうち、無得点試合は僅かに二つ。並いる世界の強豪の誇るディフェンス陣をぬっての試合だけに、無得点試合が少ないということは、彼のシュート力がいかに安定しているかを示すものでしょう。

この間のドイツナショナルチームの総得点が1656点ですからここでは、全得点の四分の一以上の得点をかせぎだしています。

11人制では5ケ国と対戦、7人制では、17ケ国と対戦しているのですから、どこの国のディフェンス陣も彼をとめることができないのが判ると思います。

また観衆も多数動員していますこれらの国際試合では、11人制で104500人、7人制で317500人の大観衆を動員しています。

彼自身の一試合の最多得点は1969年2月11日に行なわれた国内リーグの対ヒルデスハイム戦でうちたてた20点というレコードがあります。これは同時に国内リーグの記録にもなっています。

世界選手権でも、もちろん大活躍しています。

世界選手権での活躍

1963年の11人制大会では4試合及び21点をあげ、ドイツの得点王、64年の7人制大会では、4試合に登場して21点で同じくドイツの得点王、66年の11人制では5試合で24点をあげ、同じくドイツの得点王、67年の7人制大会では6試合に38得点をあげ、この大会の得点王になり、表彰されています。国際試合のほかにルブキングの活躍は次のような数字になって表われています。

Aナショナルチームの一員として98試合、523点
Aナショナルチームの一員として（対東ドイツ戦）3試合、14点
Bナショナルチームの一員として3試合、23点
選抜チームの一員として、国際親善試合で66試合、298点
GWダンケルセンの一員として、ドイツ国内の試合に於いて、504試合、2548点
国内の親善試合で、194試合、1001点
合計868試合、4407点

10年間で4407点

10年間に868試合、4407点をあげているルブキングの得点ぶりは全く驚異の他はないです。

一年間に80試合、440得点というのは、日本では現実離れしている。一週平均1.6試合8点をあげねば、このペースにおいつかないのだから、得点数もさることながら、試合数の多さにも驚かされる国際試合といっても、正式な試合のみで一年10試合近くが行なわれているのだから、ヨーロッパの交流ぶりはすざましいものがある。

西ドイツナショナルチームのコーチ、ヴェルナー・ビックは「ルブキングの上半身は、ボールを投げる時はいつでも羽が空中を舞うようにみごとにすばやくしなう」として絶賛しています。

またある新聞はルブキングを西ドイツの黄金の卵と形容しています。

このように各種のジャーナリズムにもとりあげられ、ルブキングはハンドボールだけでなく、スポーツ界のというよりは西ドイツのアイドルになっています。これは輝やかしい彼自身の記録から見れば当然とも云えよう。彼自身の活躍によって、西ドイツおよびGW・ダンケルセンは世界の桧舞台にあがっているのであるから、人気があがるのも無理はないのです。

ヨーロッパカップ獲得後のダンケルセンの街はお祭り騒ぎ、大勢のファンにかこまれ、カップを手にし、オープンカーでパレードをするという、すこぶる派手な大歓迎を受けています。もちろん、チームの大黒柱であるルブキングに対するファンの歓迎ぶりは想像を絶するものがあります。

夫人の内助もルブキングにとっては大きな援け

ルブキングこのように毎週シーズンともなれば、2回ないし3回の試合をし、席の暖まるひまがない。今日はミュンヘン、明日はベルリン、そして、さらにハンブルグ、国外と試合につぐ試合の日常です。

そこで、ルブキング夫人のイングリットさんは夫に家計上の負担の心配をなくして、ハンドボールに専念できるように、細かい心使いをしています。

夫人のイングリットさんは、スポーツ靴メーカー〝フンメル〟の代理店を経営し、家計を安定したものにしました。

西ドイツナショナルチームは従来、スポーツ靴の世界的な代表メーカー〝アディアス〟の靴を使うのが常であったが、ルブキングの顔をたて、〝フンメル〟と〝アディアス〟の両者を交互に使うことにしたといいます。

ルブキング所属のダンケルセンは、一昨年、ヨーロッパカップ11人制にルブキングが活躍して優勝したのを記念して、ルブキング夫妻をメキシコ・オリンピック観戦旅行に派遣しました。

これは単にルブキングが活躍したのに対する感謝というだけでなく、ルブキング自身が常々口にしている言葉「ミュンヘン・オリンピックで金メダルをとり、引退の花道にしたい」を実際に彼の手で実現させるために、オリンピックを見せておきたいという配慮があってのことと考えられています。

ルブキングは、ミュンヘン・オリンピックの時は31才、円熟味が加わったところでしょうから、おそらく大活躍をすることでしょう。今から約2年半、彼の得点はおそらく5000点をこえていることと思います。

ミュンヘン・オリンピックでも大活躍するための足固めを、この世界選手権でしておきたいところでしょう。

パリでの世界選手権での、ルブキングの活躍が期待されるところです。

すべての面で、日本とは違っている西ドイツの選手ですが、日本にも彼に勝てるような選手がでてきてくれることを期待したいものです。

【藤本　強】

連 載・ヨーロッパの技術研究(6)

女性チームのトレーニング

チェコチームトレーナー

P.P.A.コラリク

　スポーツの指導の理論は現在、年々高められつつある。これは男性とか一般的な人間だけの理論でなく、現在では、女性特有の理論が組みたてられつつある。

　しかしながら、現在までに提出されている女性スポーツに対する視点というのは、いわゆる男まさりの女性スポーツ家にとってのものであり、女性のもっとも女性たる〝母となること〟に対する配慮にはすこぶる欠けていた。

　医学的な観察および分析による視点でも十分このような配慮はなされていなかった。今後はこのような点にも十分に配慮し、正しい方向と調和のとれた体力の発展ということをまず第一に考えなければならない。

　そこで、我々は常に女性の重要な任務〝母になること〟を忘れずに、男子とは異った方法で女性の体力作りをしていかなければならない。

女性の練習は男性と一緒であってはならない

　前にも述べたように、男性と女性の体は、〝母となる〟という任務のため、形態的にも、機能的にも、異っているのであるから、練習法も男性とは異なる練習法が当然考慮されなければならないのである。スポーツ・ウーマンの無理をしないで、全方向に向けての体力作りを確実にするためには、この基本的な事項を決っして過少評価してはならない。

　時間が余りないので、女性の体の組織の違いをごく簡単に述べ、ハンドボール女子チームのコーチがこころえていなければならないことを列挙しよう。

体の組織の違い

　平均を中心に考えれば、身長で10cm、体重で10kgの差がある。また体の脂肪分のつきかたは男性に比べはるかに多く、全体重の28～30%が脂肪である。これに対し、男性では、約18%である。脂肪分のある場所も男性と異っている。女性の骨格は男性に比べるとずっと弱く、重心は男性より下にある筋力の発達は低く、筋力の平均は男子で24kg、女子は15kgにすぎない。筋断面1㎡当りの絶対的な力は、男子の半分から四分の一にしかならない。いわゆる外に表れる体力は男子に比べずっと弱いので大きな負荷はかけえない。

　また、女性は心臓の能力も小さいため、機能的な側面でも開発の可能性は男性と比べると少ない。

　女性の心臓の場合送り出せる血液は1分間に4.4リットルにすぎないが、男性の場合19リットルを送りだせる。

　また肺の酸素交換機能も男性に比べるとおちる。これは一つには肺の表面積が小さい（男子90㎡、女子80㎡）ことにもよるが、他面血液の絶対量にも大きく左右されている。また赤血球が男子に比べて少ないこと（1㎡当り男子で五百萬、女子で四百五十萬）によって、筋肉に十分な酸素を送ることができない。したがって、急激な筋の運動は望めないことになろう

　循環・呼吸器系統も男性に比べると低い能力しかもち合わせていない。

　女性の神経はまた不安定でもある。刺激が抑制されにくい。同時に神経は躍動的で変化に応じやすく、女性に練習によって、多くの可能性をも生み出すことを約束している。そこに練習のことをいかにして、試合中に出させるかの難かしさと可能性をもっている。

　ここにハンドボールが女性に適したスポーツかどうかの疑問も生じる。私の答は適しているとするものである。というのは、これらを総合的に考慮するならば、ハンドボールは多くのものを約束しているからである。また医学的観察もこのことを肯定している。女性にとってのハンドボールは以下のような意義をもっていると私は考えている。

　1、ハンドボールは調和のとれた体作りに適している。

　2、練習においても、試合においても、ハンドボールは全ての体

と、神経系統の完全な発達をさせることができる。

３、ハンドボールは、女性にとっての重要事〝母となること〟に対して、全く背反していない。

４、ハンドボールは魅力的な性格のある競技であり、女性美をそこなうものではない。

女子のトレーニングにはチーム・ドタターとの協調が不可欠

本題に入る前に、トレーニングの過程についての知識について、強調しておきたいことがある。女性のスポーツのトレーニングについては、トレーナーとスポーツ・ドクターとのたえざる意見の交換が必要である。このたえざる意見の交換は女性のスポーツ機能の向上の最大限に可能にする。女性のスポーツ機能の向上には、体力的と心理的の両側面から行なうのが良い。またトレーナーとドクターの協調は生理期間のこともプログラムに折りこんでおくことも必要である。また女性チームの場合には、個々の選手の性格を十二分につかみ、それぞれの性格にあったトレーニングをすることも肝要である。

女性チームのトレーナーは十二分に注意深くし、男性と女性では性格がたいへんに違うということをいつでも忘れてはならない。男性は試合でも、練習でも困難にぶつかれば、それをのりこえていくのが常であるが、女性の場合には従来経験したことのない難題にぶつかると、尻込みしてしまう場合が多い。

そこで、女性チームのトレーナーは、このことを良く頭に入れて男性と女性では、本質的にトレーニングの方法はかえていくという立場にたたないと種々の問題が生じる。ただ単に、男子のトレーニングをやや軽くするといった安易な方法では問題は解決されない。

女性のトレーニングで、特に注意しなければならないのは疲労である。特に力をつける運動の場合疲れは大きな敵となる。

単に力をつけようと量を増すことは逆効果になる。このような力をつけようとする練習は必ず他のものと適宜組み合せて行なうことが望ましい。たとえば、速さを養う運動と組み合せるのがもっとも望ましい方法である。

力をつける運動に際しては、次の三点に注意する必要があろう。

１、練習の一つ一つの詳細な点まで、個人々々の能力にあわせ考えること。

２、練習法を適宜組み合わせることを十分に考えること。

３、腕や脚の筋肉の強化だけを考えず、同時に腹筋や背筋の強化を考えること。

筋力強化にバーベルやダンベルを使う場合には、重量は決して重くしすぎないことも十分に注意しなければならない。

また体力強化というのは、一年を通して毎日々々やらなければ意味のないことを強調したい。

チェコ・ナショナルチームのトレーニングの時には、医師と意見を交換して、プランを作り、一年間実施させた。

その結果、平均して、20Ｍのダッシュで０・２～０・３秒、10Ｍダッシュ往復で、０・３～０・５秒の向上を見せたし、三歩走ってからの遠投では、２～３Ｍの距離がのびたなどの効果を生んだ。

結局、これは医師と相談の上で作ったプランが成功したといえよう。

もちろん、攻撃・防御の技術面戦術面ではより多くのプラスがあった。相手より早いスピードで走り、そこに鋭いパスがあるということがしばしば見られ、はるかに高いレベルの攻防が見られるようになった。

女性のトレーニングの場合、種々の敏感な側面をいかに理解し、そこからどうやって、力を伸ばすかが一番大きな問題になる。たとえば、トレーニングの中にリズムの変化をつけるというようなことも大切なことである。筋力を一気につけることによりも、くりかえしくりかえし、行ない、少しづつ筋力をつけていく方向が望ましい。

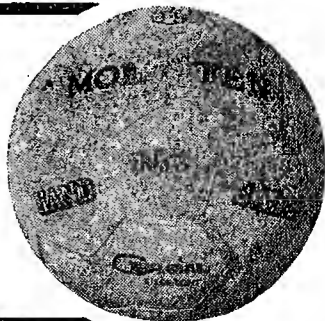
また、試合に際しての緊張度は男性に比べ女性ははるかに強い。女性の試合の時はいつも極度に緊張している。そこで、試合の前には、他のものに意識を集中させ、リラックスさせることも必要な手段である。

また戦術の応用、試合のかけひきでも、女性は男性に劣る。そこで、トレーニングの時に常に場合々々を違えて、その時どうすれば一番良いかを良くかんでふくめておかなければならない。女性チームのコーチは男性チーム以上に個々人を知っていなければならないので、男性チームのコーチ以上それに長時間を必要とする。

試合の前には、十分に休養をし過度の試合への集中をさせるように努めないといけない。

最後に、ハンドボールの試合で自らのチームに栄光をもたらすつもりのトレーナーは、単に体力だけでなく、技術面・戦術面はいうに及ばず、心理面でも十分な練習をつんでおかなくてはならない。

特に女性の場合には、心理面の影響が特に強いため、心理面での準備は非常に大切なものになってくる。

（抄訳・藤本　強）

ハンドボールの歩み（第18回）

ラピッド・ブカレスト　ルーマニアに
二度めの優勝をもたらす
デンマークは連続準優勝

ヨーロッパカップ編　⑧

今回は前回に引き続き、女子のヨーロッパカップを続けてみていくことにしたいと思う。

今回のところは一部記録が不明になっていることをまずお詫びしたいと思います。いずれかの機会に何らかの方法で、これはカバーしたいと思います。

第4回大会は1963年から1964年にかけての冬に行なわれた。前回ほぼ定着したヨーロッパカップ方式は今回も受けつがれ前年優勝チームの無条件出場はなくなり、今日行なわれているヨーロッパカップ方式が完全に施行されることになった。

参加チームは13チーム

前回大巾に増加し、14チームとなったが、今回は前年度優勝チームを無条件出場する制度がなくなったことと、前回はじめて参加したスウェーデンがチームを送らずこれにかわってノールウエーが出場したため、さしひき1チームの減になった。

連続して出場しているのは、前回は僅か3チームだったが、今回はかなりの数のチームが連続出場している。東ドイツのフォルト・シュリット・ヴァイセンフェルト三回連続出場のルーマニアのラピッド・ブカレスト、ハンガリーのスパルタクス・ブダペスト、ソ連のツルド・モスコー、ポーランドのルフ・ケーニッヒスヒョッテ、フランスのイーブリー・パリ、チエコのCKD・プラーグの7チームと半数以上のチームが連続出場である。過去3回連続出場していたオーストリーのダニユービア・ウィーンが姿を消したのが目についた。

順調な進出ぶり目だつ
プラーグはハンブルグに破れる

一回戦を不戦で進んだのは、デンマークのヘルジンガーIF、ソ連のツルド・モスコー、初出場のノールウェーのスコーグ・イドベストスラーグの三チームであり、他の10チームはいずれも一回戦から激戦をくりひろげることになった

▽一回戦

スパルタク・ブダペスト（ハンガリー）　23−7　アドミラ・ウィーン（オーストリア）
スパルタクス・ブダペスト（ハンガリー）　14−7
スパルタクス・ブダペスト2連勝

ラピッド・ブカレスト（ルーマニア）　13−5　スパルターク・ズボーチカ（ユーゴー）
　記録不明
ラピッド・ブカレスト進出

フォルト・シュリット・ヴァイセンフェルス（東ドイツ）　12−6　ルフ・ケーニッヒスヒヨッテ（ポーランド）
　5−7
フォルト・シュリット・ヴァイセンフェルス1勝1敗、総得失点差17−13

アイムス・ビュテラー・TVハンブルグ（西ドイツ）　11−4　CKD・プラーグ（チェコ）
　3−8
アイムスビュテラー・TV・ハンブルグ1勝1敗、総得失点で14−12で決定、

スイフト・ロエルモン（オランダ）　記録不明　US・イーブリー・パリ（フランス）
スイフト・ロエルモン進出

三つの試合の記録が不明であるここでは、スパルタクス・ブダペストとラピッド・ブカレストの圧倒的勝利がめだつ。ハンブルグとプラーグはホームゲームでの大勝がいちぢるしい。ハンブルグのETVのメンバーのなかには、先に来日した西ドイツチームの女子のメンバーの中の数人が所属していた。

前年優勝のツルド・モスコー敗退す

二回戦（準々決勝）はこれら一回戦に勝った5チームと不戦勝の3チームを加えて行なわれるが、ここでは大激戦が展開される。実力互格とみられるスパルタクス・ブダペスト——ツルド・モスコー、ラピッド・ブカレスト——フォルトシュリット・ヴァイセンフェルスの二試合はこの年の大会の栄冠の行方を左右する大きな試合であ

った。

▽準々決勝

アイムスビヨッテラーTV・ハンブルグ　5—4　8—7　スイフト・ロエルモン

ハンブルグ2勝

スパルタクス・ブダペスト　16—7　8—12　ツルド・モスコー（ソ連）

1勝1敗、総得失点差24—19でスパルタクス・ブダペストの勝利

ヘルジンガー・IF（デンマーク）　11—9　記録不明　スコーグ・イドベスト・スラーグ（ノルウェー）

ヘルジンガー・IFの進出

ラピッド・ブカレスト　9—10　記録不明　フォルトシュリット・ヴァイセンフェルス

1勝1敗、得失差でラピッド・ブカレスト進出

ここでベストエイトに残っていた東欧圏、西欧圏各4のチームがそれぞれ2チームづつへることになり、ベスト・フォアは東欧2、西欧2の組み合せとなった。前回はベストエイトに西欧圏は僅か2チームしか送っていない。この西欧圏の進出は多分にくじ運にめぐまれている感じも強いが、とにかく、デンマークと西ドイツの女子チームがそこってベスト・フォアに入っていることは多くなく、次回にオランダとデンマークが入った以外にはみられない。63年〜65年にかけ、一時西欧圏が力をつけまきかえしかけた一時期があったことを記憶しておいていただきたい。

ラピッド・ブカレスト 圧倒的強さ

デンマークは再度決勝進出

▽準決勝

ヘルジンガー・IF　6—7　8—2　アイムスビヨッテラーTV・ハンブルグ

1勝1敗、ヘルジンガー、IFが総得失点差14—9で決勝に進出した。

ラピッド・ブカレスト　13—5　11—7　スパルタクス・ブダペスト

ラピッド・ブカレスト2勝

ラピッド・ブカレストはホームゲームを大差で握り、まず勝利の足固めをし、ビジターとして、ブダペストに行き、ここでも11—7と大差で破り、強さを見せつけた前回準決勝でFIF・コペンハーゲンに借敗し、無念の涙をのんだラピッド・ブカレストは今回は強敵と考えられるスパルタクス・ブダペストを見事に打ちやぶり、決勝に進出することになった。

もう一方の準決勝の試合、ヘルジンガー・IFとアイムスビヨッテラーTVハンブルグの試合は、ハンブルグでは、アイムスビヨッテラーが1点のリードで1勝し、あるいは西ドイツが念願の決勝進出を果すかとも考えられたが、続いて行なわれたヘルジンガーのホームゲームで2—8と大敗し、決勝進出は夢におわってしまった。

結局、決勝はヘルジンガー・IFとラピッド・ブカレストいう。東欧、西欧の名門同士の対決となった。デンマークは前回に初登場し、決勝で借しくもツルド・モスコーに破れ、今回はぜひともヨーロッパカップを持ち帰りたい。一方のラピッド・ブカレストは、2回、3回、4回とヨーロッパカップに連続出場を果したチーム。2回大会では、準々決勝で、自国のスチインタ・ブカレストと対戦するハメに陥り、ここで僅か2点の差で借敗、第3回大会では、準決勝でデンマークのFIF・コペンハーゲンにこれまた1点差で借敗したチーム。どちらも何とかしてカップを手にしたいというチーム同士の対決となった。

ラピッド・ブカレスト 辛くも勝利を握る

▽決勝（一試合）

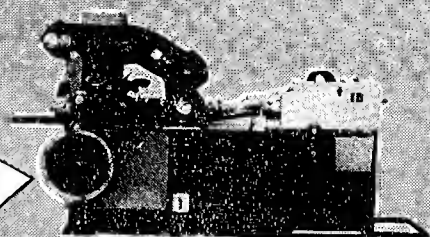
ラピッド・ブカレスト　14—13　ヘルジンガー・IF

期待にたがわぬ大熱戦となったおいつ、おわれつのゲーム展開となり、僅かにチャンスをつかむ数の多かったラピッド・ブカレストが勝利を握った。このあと二度の大会にルーマニアは欠場しているこのヨーロッパカップに優勝した64年の冬。ここらまでがルーマニア女子の極盛期でヨーロッパカップを二度獲得、11人制、7人制の世界選手権保持者と世界の栄冠はすべてルーマニアにあるという状態が続いた。

これ以後、まずハンガリーの抬頭、続いて、ユーゴー、ソ連、東ドイツの抬頭が見られ、現在に至っている。

これ以後、二度の大会に何故ルーマニアが欠場したが、理由は判らないが、丁度これが、ルーマニアから、他の国へイニシァティブが移行する時期だけに興味深い問題であろう。

このへんが、男子が10年近く、ルーマニア・チェコ時代が続いているのと比べ、女子のケースを代表するものとして興味深い。世界的な傾向として、女子の王座は入れ替りが激しい。男子では、諸外国の国内リーグでも連勝のケースがかなり見られるが、女子はその入れ替りが急である。一つには、選手の寿命が男子に比べ、短いことも原因にあろう。そこで常に不動のメンバーが組めず、何人かが引退すると、ガタンとチーム力の低下を招いてしまうということがしばしばみられるようである。これが栄冠の行方をコントンとさせてしまう原因になっているようである。

（藤本　強）

各地の記録

中京クが連続の栄冠
大同製鋼、2位に進出

県内3分野の各上位2チームによってチャンピオンチームを争う昭和44年度（第2回）愛知リーグは12月1日から5日までの5日間名古屋市体育館で行われた。

各チームのレベルアップから好内容の試合が連続したが、中京クが中京大に引き分けながら大同製鋼以下をおさえ、昨年につづいて優勝を飾った。

富士製鉄名古屋 12 (7-6, 5-5) 11 中京大
大同製鋼 24 (14-9, 10-2) 11 名城大
中京ク 29 (16-7, 13-2) 9 桜丘会
大同製鋼 19 (10-7, 9-11) 18 桜丘会
富士製鉄名古屋 8 (7-3, 1-4) 7 名城大
中京ク 17 (10-7, 7-10) 17 中京大
引き分け
中京ク 21 (11-6, 10-4) 10 富士製鉄名古屋
大同製鋼 16 (9-6, 7-6) 12 中京大
桜丘会 12 (9-5, 3-6) 11 名城大
中京大 9 (4-7, 5-2) 9 名城大
引き分け
桜丘会 14 (11-7, 3-7) 14 富士製鉄名古屋
中京ク 16 (9-4, 7-7) 11 大同製鋼
大同製鋼 16 (7-7, 9-6) 13 富士製鉄名古屋
中京ク 20 (8-8, 12-4) 12 名城大
桜丘会 19 (8-5, 11-6) 11 中京大

【順位】①中京ク4勝1分②大同製鋼4勝1敗③桜丘会2勝2敗1分（得72）④富士製鉄名古屋2勝2敗1分（得57）⑤中京大2分3敗⑥名城大1分4敗

香川大が優勝飾る

▼香川県総合選手権（11月・高松工芸高）

▽男子準々決勝
多度津工A ― 三本松高
香川大 15―11 三本松OB
高松工芸A 15（分）15 高松ク
抽せんで高松工芸Aの勝ち
香川教員 22―10 高松工芸B

▽同準決勝
高松工芸A 15―8 多度津工A
香川大 14―8 香川教員

▽決勝
香川大 15―10 高松工芸A

▽女子準決勝（＝1回戦）
三本松高 7―4 高松南高
高松女商 5―2 三本松OG

▽同決勝
高松女商 11―2 三本松高

順天堂大同士で決勝

▼千葉県秋季選手権（11月・佐原高、八千代高）

▽男子準々決勝
千葉商大B 22―12 国府台高
順天堂大B 21―14 木更津高
順天堂大A 棄権 千葉教員
千代田印刷機製造 26―7 千葉工大

▽同準決勝
順天堂大B 20―10 千葉商大B
順天堂大A 14―13 千代田印刷機製造

▽同決勝
順天堂大A 27 (14-10, 13-8) 18 順天堂大B

▽女子決勝
昭和学院高 15 (11-0, 4-2) 2 佐原女高

小金と昭和学院勝つ

▼千葉県高校大会（11月・昭和学院）

▽男子準々決勝
清水 16―12 佐原
国府台 18―5 鶴舞雪解沢
小金 15―12 木更津
八千代 23―4 鶴舞

▽同準決勝
小金 13（分）13 清水
抽せんで小金高の勝ち
八千代 14―5 国府台

▽同決勝
小金 13 (7-6, 6-5) 11 八千代

▽女子準決勝（＝1回戦）
昭和学院 15―3 八千代
佐原女 不戦勝 和洋附国府台

▽同決勝
昭和学院 8 (5-1, 3-2) 3 佐原女

山梨は明誠と山梨高

▼第10回山梨県高校新人大会（11月・甲府市）

▽男子準々決勝
塩山商 15―8 甲府商
韮崎工 19―9 甲府一
明誠 10―3 吉田
機山工 15―14 園芸

▽同準決勝
塩山商 16―3 韮崎工
明誠 16―8 機山工

▽同3位決定戦
機山工 8―2 韮崎工

▽同決勝
明誠 10 (5-3, 5-5) 8 塩山問

▽女子準々決勝
日川 5―3 塩山商
山梨 19―0 甲府二
園芸 4（分）4 長坂
抽せんで園芸高の勝ち
甲府商 17―1 湯田

▽同準決勝
山梨 10―4 日川
甲府商 8―1 園芸

▽同3位決定戦
日川 8―2 園芸

▽同決勝
山梨 14 (5-1, 9-1) 2 甲府商

中京クの連勝つづく

▼第8回愛知クラブ・リーグ（11月・名古屋市体育館）＝男子のみ

▽1部
東海ク 24―12 愛教ク
東海ク 25―17 東杏会
愛教ク 19―13 東杏会
中京ク 43―12 愛工ク
桜丘会 24―7 東杏会
中京ク 31―8 愛教ク
愛工ク 23―22 愛教ク
桜丘会 21―15 東海ク
桜丘会 24―13 愛工ク
中京ク 23―9 東海ク
東杏会 25―12 愛工ク
桜丘会 18―10 愛教ク
中京ク 19―11 東杏会
愛工ク 32―24 東海ク
中京ク 16―14 桜会丘

【順位】①中京ク5戦全勝②桜丘会4勝1敗③東海ク・愛工ク2勝3敗⑤東杏会1勝4敗⑥愛教ク1勝4敗

▽2部A組①名城ク②大江ク③尾北ク④東山ク⑤名大ク

▽同B組①鯱ク②愛商ク③南山ク④一宮ク⑤中川ク

▽2部1・2位決定戦
鯱ク 21―13 名城ク

10回迎えた熊本県教職員

▼第10回熊本教職員大会（12月・熊本市商）

▽高校教職員の部準々決勝
鹿本高教 15―1 人吉高教
九州女学院教 11―7 荒尾高教

菊池農教　13—7　水俣高教
第一工教　9（分）9　鹿本商工教
　抽せんで第一工高教職員の勝ち
▽同準決勝
九州女学院教　6—5　鹿本高教
菊池農教　8—6　第一工教
▽同決勝
菊池農教　12（7—3、5—5）8　九州女学院教
▽小・中学校教職員の部準々決勝
白川中教　9—7　西部中教
マリスト中教　8—2　人吉一中教
尚絅中教　5—4　豊福小教
牛深中教　7—0　竜南中教
▽同準決勝
牛深中教　7—3　尚絅中教
マリスト中教　4（分）4　白川中教
▽同決勝
マリスト中教　7（3—5、4—1）6　牛深中教

日新製鋼が初優勝

▼広島県一般室内選手権（1月・呉市体育館）＝男子のみ
▽1回戦（2試合）
修道ク　19—7　広島商大
全広商大　15—13　広島大
▽準決勝
修道ク　18—9　三菱レ大竹
日新製鋼呉　25—11　全広商大
▽決勝
日新製鋼呉　17（10—8、7—8）16　修道ク

津山商、真備を降す

▼岡山県高校室内選手権（1月・岡山県営体育館）
▽男子準々決勝
天城　18—6　津山
倉敷商　19—5　勝間田農
児島　13—9　邑久
津山商　8—6　矢掛
▽同準決勝
倉敷商　13—12　天城
津山商　9—4　児島
▽同決勝
倉敷商　10（6—3、4—5）8　津山商
▽女子1回戦（1試合）
津山商　15—4　西大寺
▽同準決勝
津山商　6—1　井原
真備　13—0　操山
▽同決勝
津山商　7（4—2、3—0）2　真備

一般は児島高OB勝つ

▼岡山県一般男子室内選手権（1月・岡山県営体育館）
▽準決勝
岡山大　23—10　九州耐火
児島高OB　20—16　岡山教員
▽同決勝
児島高OB　19（7—5、12—10）15　岡山大

地方球信

伝統の小学校大会

【名古屋】　昭和26年以来の実績をもつ名古屋市小学校ハンドボール指導会は今年19回目を迎え去る11月30、12月7、13の3日間、名古屋の汐路小学校に男子18、女子8チーム、400名の豆選手を集めて盛大に行われた。

コートの広さ35m×20m、男女とも15分ハーフ、使用球が「教育1号ボール」と決められた以外はほとんど成人ルールに同じで、寒風をふきとばす熱戦が相次ぎ、なかにはフリースローライン（9m）からのロングシュートやポストプレー、ブロックプレーをこなすチームもあり、関係者もそのレベルアップに舌をまいた。身体的に恵れたチームが多くなったのも目立ち年々試合のスケールが大きくなっていくのもたのもしい。優勝した汐路小は2年つづけての男女制は。男子はしかも3連勝である。

この大会は毎日新聞（中部版）に大きくとりあげられた。　　（西川）

▽男子準々決勝　荒子小B　9—8　瀬古小B、汐路小A　12—7　愛知小A　中川小　6—3　荒子小A、柴田小B　10—3　東白壁小B
▽同準決勝　汐路小A　7—4　中川小、荒子小B　11—10　柴田小B
▽同決勝
汐路小A　11（7—6、4—2）8　荒子小B
▽女子準々決勝、　明治小　19—0　中川小、汐路小　15—1　児玉小　香流小　不戦勝桜小A、瀬古小　不戦勝　桜小B
▽同準決勝　汐路小　9—3　香流小、明治小　15—1　瀬古小
▽同決勝
汐路小　5（0—3、5—0）3　明治小

【写真は男子で優勝した汐路小学校Aの攻撃ぶり（対愛知小A戦）】

訃報

茨城県協会長桒谷秋之助氏は本年1月他界されました。哀悼の意を表します。

お詫び

▽本誌71号5頁、全国評議員会出席者に富山協会会長高田義一氏の名がおちていました。慎しんでお詫びいたします

▽本誌71号7頁、全日本選抜選手権日程は印刷・発行後大巾に変更され、またNHKTVの放送時間も変更となり、読者各位に御めいわくをおかけいたしました。お詫びいたします。

訂正

本誌70号（44年11月号）「特別研究論文・ハンドボール発祥はデンマーク」のうち25頁2段目の「協会正式登録者」のデータを次のように訂正します。

『西独は一二八人に一人、日本は一、三八二人に一人、デンマークは実に四九人に一人の密度だ。驚くべき数字である。…』

「各地の記録」「地方球信」への寄稿を歓迎いたします。用紙自由。あて先は東京都渋谷区神南1の1の1、日本ハンドボール協会編集部

・・・・編集後記・・・・

多大の期大をになって、田村会長以下の選手団ヨーロッパに出発します。良い試合をし、好成績を収めてほしいものです。

来年度がハンドボール界にとっても本誌にとっても飛躍の年でありますように。

来年度からはぜひ本誌を個人購読でお読み下さい、同封してある振替用紙でどうぞ。　　（TF）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』 第七十二号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十五年一月二十五日印刷 昭和四十五年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）